黒と白のComposition

松村順

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

碁には興味がないが，黒石と白石が織りなす黒白模様に惹かれる専門学校生ルミ。佐為は，ヒカルのもとを去って１０年を経た後，彼女の夢の中に現れ，神の一手を極めるために，自分の代理人となって碁を打ってほしいと頼む。ネット碁のＡｒｃｈｉｖｅ　ｏｆ　ｓａｉ（佐為資料館）にある佐為の棋譜の美しさに魅了されているルミはこの願いを聞き届け，ネット碁で対局を始める。佐為の碁が作り出す黒白模様を無邪気に喜ぶルミの知らぬ間に，佐為の復活がネット碁に知れ渡り，やがて塔矢行洋やヒカルにも知られるようになる。

Ｐｉｘｉｖにも投稿しています

目　次

1：プロローグ ―― 1
2：出会い ―― 6
3：F・saiの波紋 ―― 19
4：再会 ―― 29
5：三人 ―― 38
6：佐為の代理人 ―― 53
7：Compositiｏｎ001 ―― 66
8：白銀（しろがね）の時代 ―― 75
9：去る者　残る者 ―― 84
10：番外編 ―― エピローグ ―― 99

1：プロローグ

「囲碁って、つまんないの！」
と、幼い女の子がつぶやく。客と碁を打っている祖父がにこやかな顔で、
「じゃあ、ルミちゃんはどうしていつも、そんなに熱心に碁を眺めているんだい？」
と問い返す。すると、女の子はふくれっ面してフンと横を向き、おかっぱ頭を揺らせながらその場を立ち去る。もう何十回も繰り返された光景。祖父も客も、すっかり見慣れてしまった。
「ルミは、この黒白模様を眺めるのが好きらしいんです。あの子には独特の美意識があって、せっかく黒石と白石がきれいない模様をなして並べてあるのに、囲われた石を、1個や2個ならともかく、5個も10個も剥がしてその模様に穴を開けるのが許せないらしいんですよ。だから、こうやって黒であれ白であれ、大石を剥がす場面になると、あの決まり文句を吐くんですな」
「おもしろいお嬢ちゃんですね。でも、見どころがありますよ。囲碁を教えないんですか？　まだ、あの年では早すぎますか？」
「一度、教えようとしたんだが、まったく聞く耳持たんようで、無理強いして嫌いにさせては元も子もないと思って、それっきりです。まあ、機会を見てまた教えようかと思っていますよ」
この会話も、何度か繰り返されたものだ。
ある日、いつものようにルミが祖父と客の碁を眺めていて、いつものように石が剥がされる場面に立ち至った。この時、ルミは石が剥がされて穴の空いた黒白模様をじっと眺めている。
「ルミちゃん、今日はどうしたんだね？」
碁盤をじっと眺めているルミは
「こっちの方がきれい」
とつぶやいた。祖父と客は顔を見あわせ、ほほえんだ。やがて局面が進行し、また石が剥がされる場面に至ったが、この時はルミはいつもの決まり文句を吐いて去って行った。たった一度きりのできごと。

やがてルミが小学校にあがる頃、祖父は病に伏せるようになり、もはや碁盤が出されることはなくなった。それから1年ほどして祖父は亡くなり、碁盤の存在さえ忘れられるようになった。そして、何十回と繰り返された場面の記憶も失われた・・・・いや、失われたわけではない。この記憶の上に、小学時代、中学時代の雑多な経験が積み重なり、見えなくなっただけ。

ルミは美術が得意ではない。下手ではないけど苦手意識があった。同級生に絵のうまい子がいたせいかもしれない。その子は風景でも人物でも、実物そっくりに描ける。広々とした筑後川の河原と、その向こうに広がる平野、さらにその向こうに低く連なる山並み。あるいは同級生や教師、家族の肖像など。そんな同級生をうらやましく思う一方、

〔どんなにうまく描いても、絵よりも実物の風景の方がきれい。それなら、絵を描くより風景を眺めている方が楽しいじゃない。どんなにうまく描いても、絵よりもほんものの人の方がきれい。だったら、絵を描くよりその人と会う方が素敵じゃない〕

とも思う。それは、絵をうまく描けないことの負け惜しみかもしれないけれど。

そんなルミが高校で芸術科目として美術を選んだのは、書道はまったく経験がなく、音楽は歌も下手なら楽器は何一つ演奏できないと自覚していたための消去法の選択だった。

1年の3学期、美術教師は何コマかを使って美術史の授業をした。古代ギリシアから始まって現代まで駆け足で解説していくが、最後の現代美術でダリやピカソなどとともにモンドリアンを紹介した。ルミは『構成』（Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ）と題された連作、縦横の不等間隔の直線で区切られた大小不同の格子を赤、青、黄、黒などごく限られた色で塗り分けた絵を見て、〔これも「絵」なんだ〕と思った。それまでルミにとって絵とは、風景であれ人物であれ果物であれ、現実にあるものを描写するものだった。〔現実にない、色と形を組み合わせただけのものも絵なんだ〕。

2年生になるとルミは、モンドリアン風に色の格子を組み合わせた

「絵」を課題として提出するようになった。教師は特にとがめなかった。一応「進学校」とされているルミの高校、芸術科目は生徒だけでなく教師も息抜きの時間と見なしており、授業中騒いだりサボったりしなければ、かなりのことは大目に見た。ただ、
「これは絵というよりデザインだね。まあ、それはそれで構わないけど」
と教師はルミに語った。
1学期の終わり頃、期末試験も終わりいささか弛緩した雰囲気の中で、美術の教師は授業の開始時に
「今日はいろんな色の色画用紙を持ってきました。各自、好きな色の画用紙を選んでください。それに、何でも好きなものを描いていいです」
と言った。ルミは褐色あるいはオークルというような色合いの画用紙を選んだ。いつものような「構成」、教師に言わせれば「デザイン」を描こうと思い、どんなふうに画用紙の空間を区切るか考えたけど、うまいアイデアが思い浮かばない。それで、定規で縦横の格子線を等間隔に何本も引いた。こうしてできたマス目に色を塗っていこうと思ったが、なぜかふと思いついて、格子線の交点に白か黒の円を描き始めた。生徒たちの間を歩いて監督していた教師がルミの脇に立ち止まった。
「君はずいぶんおもしろいことをしているね。たいてい、そういう場合はマス目を塗りつぶしていくものだし、今までの君の課題作品もそうだった、今日は交点に色を塗ってるね」
そして一呼吸おいて、
「まるで碁盤に碁石を並べているみたいだ」
それまで画用紙を見つめて熱心に色を塗っていたルミは、その声を聞いてふと顔を上げ、しばらくボーッとしたように考え込んでいた。そして、突然、ひとかたまりの記憶がよみがえった。
お客を相手に碁を打つ祖父の姿。夏は縁側で、冬は障子を閉め切った居間で、碁盤に黒石と白石が置かれてできあがっていく黒白模様。そうやってせっかくできあがった黒白模様に無残な穴があけられる。

そして、「囲碁って、つまんないの！」という幼い自分の声。何十回となく繰り返された場面。どうして、今まで忘れていたんだろう、忘れていることができたんだろう？

それからまた画用紙に向かったルミは思い当たった〔この画用紙、碁盤の色だ〕

２学期になると、ルミは美術の時間に、画用紙に碁盤のような等間隔の格子線を描き、その交点に小円を描くことを始めた。ただ、困ったことに、白の画用紙に白丸は描けない。その日は黒と薄い黄色を塗ってみた。その後、赤と青、黒と青、黒と薄いピンクなどいろんな組み合わせを試したが、どれも今ひとつピンとこない。

〔やっぱり、木の色を背景に黒と白の模様を作りたいなあ〕

そんなことを考えているうちに２年生は終わり、３年生になると芸術科目の時間はなくなったが、ルミは木地色の色画用紙を何枚か買い込み、暇な時に碁盤の目の格子線を引き、黒白の小円を描いてみた。楽しかった。

夏休み前、進路を話し合う三者面談でルミが「美術・デザイン系の専門学校に進学したい」という希望を述べた時、親も教師も驚いた。ルミが美術に興味があるとは思っていなかったから。実際、ルミはむしろ文学少女と思われていた。本を読むのが好きだったし、部活も文芸部。だけどさほど熱心な部員ではない。部員の中には、詩や小説を書き、年１回発行される文芸部の雑誌に掲載されている者や、将来は詩人や小説家になることを夢見ている者もいるが、ルミはそんな野心を持たず、人の書いたものを読むだけで満足していた。自分には詩人や小説家になるほどの才能がない、ただ本を読むのが好きなだけと信じ、そんな自分の状況を静かに受け入れていた。暇な時間には自分の部屋で本を読んでいる物静かな女の子、それが親も教師もルミに抱いているイメージだったし、ルミの自己認識も同じようなもの。ただ、３年生になって、たまに、１週間か２週間に１回くらい、木地色の画用紙に格子線を引き、黒白模様を描くようになった。それが、ルミにとって生活の一部、不可欠の一部になっていた。

「絵を描きたいんじゃないんです。デザインを本格的に勉強したいん

です」
　親と教師は顔を見あわせた。
「わたし、東大や九大に入れるほど頭が良くないことは分ってます。まあ、二流、三流の大学なら現役合格できると思うけど、今時、そんなレベルの大学を出たって、どうしようもないでしょう。だったら、自分がやってみたいことにチャレンジしたいです」
　三者面談の前日、心の中でリハーサルしておいたせりふ。ルミは自分でも驚くほど、断固とした口調、態度で言い切った。親は以前から「ルミが勉強したいことがあるのなら、学生であるうちは学費と最低限の生活費は仕送りしてあげる」と言ってくれている。今の時代、学費だけでなく「最低限」であれ生活費も仕送りしてもらえるのは、恵まれた部類だろう。その恵まれた環境をルミは素直に享受したいと思う。
〔でも、何か学校に行って勉強したいと思うものがあるかな?〕
　本を読むのに学校で勉強する必要はない。図書館のそばに住んで、好きな本を借りて読めばいいだけのこと。
〔勉強したいことって・・・・〕
　その時、ルミの心に浮かんだ、黒白模様を描く時間の楽しさ。一度忘れ、再び見つけ出した幼年時代の思い出に連なる黒白模様を描く時の充実感。
〔これは絵じゃなくてデザインだって美術の先生は言った。デザインなんて、きちんと勉強したことがない。勉強してみようかな?〕
　プロのデザイナーになれるあてはない。なれるかもしれない、なれないかもしれない。なれないなら、なれないで仕方ない。ただ、せっかく親が勉強する時間を与えてくれるのなら、これを勉強してみたい。この黒白模様の世界を旅してみたい。

２：出会い

東京の美術系専門学校に入学して１年と１ヶ月が過ぎた。

わたしは、古い小さなワンルームマンションの小さな机を占領するデスクトップ・パソコンを満足げに眺めている。春休みのアルバイトの給料で買った、ＷｉｎｄｏｗｓＸｐを搭載した中古パソコン。５年前に次世代のＷｉｎｄｏｗｓＶｉｓｔａが発売され、３年前にはＷｉｎｄｏｗｓ７も発売されたけど、今でも「使い勝手がいい」という評判のＯＳ。少なくとも、これまで使っていた時代物のＷｉｎｄｏｗｓ９８に比べればずっと使いやすい。コンピューターグラフィックスの操作も軽やかだ。今日、５月５日こどもの日に配送され、自分でセットアップし、インターネットにも接続した。さっそくＷｏｒｌｄＧｏのサイトにアクセスする。自分で碁を打つのではない。参加者が碁を打つのを眺めている。パソコンディスプレイの碁盤に黒白模様ができあがっていく様子を見るのが楽しい。もっとも、わたしの美意識にかなう模様が作られることは少ない。だけど、１局をずっと見ていると１回くらい［わあ、きれい］と思える模様に出会える。それから次の石が打たれると、その模様は変化してしまう。はかない美であるけど、だからなおさら、いとおしい。

対局を眺めるだけでなく〝Ａｒｃｈｉｖｅ　ｏｆ　ｓａｉ〟というサイトの中の部屋というのかセクションというのか、１区画を訪れることもある。そこには、かつて「最強、無敵」と謳われたｓａｉというネット碁の打ち手の棋譜が集められている。１００枚あまりの棋譜はわたしの美意識をくすぐる。できることなら、最終的にこれらの棋譜ができあがる対局のプロセスも眺めていたかったと思う。不可能な願いだけども。

わたしがこのサイトを知ったのは今年の初め頃。同級生のユカに教えられた。ユカはわたしがこのサイトを知らないのを不思議がった。

「あんなに碁盤の黒白模様が好きなルミがこのサイトを知らなかったとは意外。碁が好きなんでしょう？」

「碁は別に好きじゃない。あの模様が好きなだけ」
「ふーん」
　ユカは不思議そうな顔をしたけど、特に突っ込むことはなく、ＷｏｒｌｄＧｏのアドレスを教えてくれた。
　Ａｒｃｈｉｖｅ　ｏｆ　ｓａｉを知ったのはほんの２～３週間前。以来、気に入って、対局を覗いた後に立ち寄っている。今日も、セットアップが終わり、サイトで対局を２局見た後、ｓａｉの棋譜を眺めているうちに、慣れないセットアップ作業に疲れたのか、座ったままうとうとした・・・・
　・・・・目の前にきれいな人が立っている。昔風の衣装。直衣というのかしら、狩衣というのかしら、確か平安時代の衣装。それに烏帽子。そこから艶のある黒髪が肩の下まで垂れている。柔和で優雅で美しい顔立ち。でも、衣装からして男の人。その人がわたしに声をかける。
「わたしが見えるのですね？」
　わたしはうなずく。
「わたしの声が聞こえるのですね？」
　わたしはまたうなずく。
　その人の表情に喜びの色が広がる。
「ああ、再び戻って来れました。感謝いたします。わたしはまた碁を打てる。神の一手を探求できる」
　そう言って、その人はわたしを見つめる。その美しくキラキラした眼差しを、わたしは受け止める・・・・
〔・・・あっ、うつらうつらしてた。いけない、いけない。初夏といっても夕方になれば冷えてくるから、こんなことしていると風邪を引くわ〕
　そう思ってわたしはキッチンで熱いコーヒーでもいれようと思って椅子から立ち上がり、振り返って、びっくりした。さっき、まどろみの夢の中で見たのと同じ人が立っている。
〔わたし、まだ目が覚めてない〕
　と思って頬をつねったり、額を叩いたりしていると、その人が話し

かけた。
《お嬢さん、もう目覚めてらっしゃいますよ。わたしは夢ではありません》
《えっ！・・・・》
《驚かないでください、と言うのは無理でしょう。きっと驚きますね。でも、心配しないでください。怪しい者ではありません。危険な者ではありません》
　そう語るその人の瞳はあくまで澄んでいる。
《なんてきれいな瞳・・・・この直感を信じよう。この人は悪い人ではない。それに、もし悪人なら、わたしが眠っている間に悪事を働いているはず・・・・》
　わたしは、椅子に座り直した。
《あなたは誰？》
《わたしは藤原佐為ともうします》
《フジワラノサイ？　どこから入ってきたの？　鍵は閉まっているはずよ。それに、その時代がかった衣装は、何なの？》
　わたしの問いに答えてその人が語ったこと。ほとんど信じられない、いや、まったく信じられないような話。でも、わたしはなぜか信じる気になった。その瞳の澄んだ美しさのために？
／／／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／／／／
　わたしは千年も昔、都で帝の碁の指南をしておりました。しかし、御前対局で罠に落ち、都を追い出されて、入水自殺いたしました。恨みと未練を残したわたしの霊は成仏することなく、それから何百年も碁盤に潜んでおりました。わたしは碁盤に近づく人に呼びかけるのですが、わたしの声は誰にも聞こえません。そんな虚しい数百年が過ぎたある日、虎次郎という幼い子供がわたしの声を聞いてくれたのです。その子供は碁を学んでおりました。そして、わたしの願いを聞き届け、以後はわたしに碁を打たせてくれました。・・・・ああ、わたしには体がありません。虎次郎だけはわたしの声を聞くことも姿を見ることもできるのですが、わたしは自分では碁石はおろか塵一つ動

かすことさえできません。ですから、わたしが碁を打つためには、虎次郎がわたしの声を聞き、わたしの言うとおりに碁盤に碁石を置いてくれないといけないのです。それは、傍目には虎次郎の碁にしか見えません。

わたしの棋力を宿した虎次郎の碁の名声は高まり、城碁を打つようになり、ついには本因坊家の世嗣に迎えられました。本因坊秀策その人です。秀策の体を借りて、わたしは碁の最善の一手、神の一手を目指しました。ですが、虎次郎は・・・・虎次郎は、はやりやまいで34歳の若さで死んでしまいました。わたしは願いを遂げられぬまま、また碁盤に潜んで時を過ごすことになったのです。

それから百年以上を経て、進藤ヒカルという少年がわたしの声を聞きました。ヒカルは虎次郎と違って、碁にはまったく興味のない子供でした。でも、わたしの願いで碁会所に行き、そこにたまたま居合わせた同じ年頃の子供と対局してくれました。その子は塔矢アキラといって、すぐにでもプロの棋士として通用するほどの腕の持ち主でしたが、わたしは勝ちました。その時の塔矢アキラの真剣な眼差し。ヒカルはそれに感化されて碁に興味を持つようになりました。わたしはもちろん喜んでヒカルに教えました。わたしのすべてをつぎ込むように教えました。そしてヒカルはそれに応えてくれました。乾いた砂が水を吸い込むようにわたしの教えを吸収しました。しかも、ヒカルは塔矢アキラにも勝る素質、才能の持ち主でした。わたしから碁を学び始めて、たった2年でプロ試験に合格しプロの棋士になったのです。だけど、いや当然のことですが、ヒカルは自分の碁を打ちたがりました。

お分かりいただけますか？

さきほども申し上げたとおり、わたしは体を持ちません。自分では碁石を置くことができないのです。わたしが碁を打とうと思えば、ヒカルに打ってもらわないといけないのです。ヒカルが、自分の考えではなく、わたしの言うとおりの場所に碁石を置かないといけません。でも、それは傍目にはヒカルが打っていることになります。その頃、わたしとヒカルの棋力は圧倒的な差がありました。その状態でわた

しが打てば、つまり、ヒカルにわたしの碁を打たせれば、ヒカルはあっというまに最強の棋士になってしまいます。そして、ヒカルが自分の碁を打とうとすれば、「手抜き」との非難を浴びることになるでしょう。ヒカルはそんなことを望みませんでした。当たり前です。碁打ちであれば誰しも、自分の碁を打ちたいのです。たとえ、自分で考えるよりわたしの言うままに打つ方が勝てるとしても、それでも、自分の碁を打ちたいと願うのです。それが碁打ちというものです。そして、ヒカルをそのような碁打ちに育てたのは、ほかでもないわたしなのです。こうして、ヒカルが自分の碁を打つためには、わたしに碁を打たせてはいけない、そんな状況になってしまったのです。

そんな中でも、ヒカルは、わたしが碁を打てるよう、できるだけのことをしてくれました。そして、日本棋界の最高峰と言うべき塔矢行洋名人とネット碁で対局する機会さえ作ってくれました。それはわたしにとって最高の対局、わたしの最良の思い出です。そして、ヒカルに最善の手を示すことができたと自負しています。この対局を終えて、わたしはまさにこのために、この最高の対局をヒカルに見せるために、ヒカルのもとによみがえったのだと悟りました。そこでわたしの役目は終わったはずでした。でも、わたしはまだずっとヒカルと一緒にいたかった。そして、わたし自身が碁を打つ機会を得て神の一手を極めたいと願っていました。だけど運命はこんなわたしの願いを聞くこともなく、役目を終えたわたしをヒカルから引き離しました。わたしは別れの言葉をかけることもできませんでした。ヒカルが眠っている時、わたしはヒカルの前から消えたのです。わたしにできたのは、何も知らずに眠っているヒカルに悲しい顔を向けないことだけでした。

ただ、それでも一つの救いが用意されていました。それから2ヶ月ほどして、わたしはヒカルの夢に現われることができたのです。わたしはできるかぎりの笑みを浮かべてヒカルに会いました。そうしたら、ヒカルは楽しそうにいろんなことを話してくれました。そして、わたしにこう問うたのです、

「消える時、どんな気持ちだった？　悲しかった？　それとも今みた

いに笑ってた？・・・・笑ってたら、いいな」
　わたしが何も言わないまま消えてしまったことを悲しんだはずのヒカルは、自分の悲しみを語る代わりに、わたしの悲しみに気遣ってくれたのです。
　わたしは、できるかぎりの笑みを見せました。
／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／／
　その人は語り終えた。わたしはしばらく何も言えなかった。その人も何も話さなかった。しばしの沈黙の後、わたしが口を開いた。
《それで、どうして、また戻ってきたの？　それも、進藤ヒカルさんでなく、何の縁もないわたしに？》
《戻ってきた理由は、もっと碁を打ちたいからです。わたしは結局、ヒカルのもとで神の一手を極めることができませんでした。この願いが叶えられないうちは、わたしの霊はこの地上に留まるのです。なぜ、ヒカルではなく、あなたのもとに戻ったのか、それはわたしにも分かりません》
《そう・・・・それで、あなたは何をしたいの？》
《碁を打ちたいです。より正確に言えば、あなたに碁を打ってほしい。わたしに代わって》
《あなたの言う碁盤の場所に石を置いてほしいということ？》
《そうです》
　その人はわたしを見つめて、はっきりそう答える。その澄んだ視線をわたしは拒否できない。いや、拒否したくないという気持ちが湧いてくる。
《・・・・分かったわ。でも、一日中ってわけにはいかないの。わたしにはわたしの生活があるし、わたしがしたいこともあるから。時間を区切ってね。たとえば1日1時間とか》
《・・・・それは、いたしかたありません。あなた様の時間を使わせていただくのですから》
《それと、もう一つ。碁を打つには相手が要るわね。相手をどうやって見つけるの？》

《ああ、それは・・・・》
　と言いながらその人は机の上のパソコンを指さす。
《この箱は「パソコン」と申すものですね？》
《そうよ。よく知ってるわね》
《この箱で碁が打てるはずです。ヒカルと一緒にいた時、1ヶ月ほど毎日のように打っておりました。ネット碁というものです》
《ああ、そうね。ネット碁ならいくらでも相手を見つけられる。と言うか、今わたしはネット碁を見てたのよ》
《えっ？》
　パソコンはわたしが居眠りしている間に休止状態になっている。適当にキーを押して再起動させた。その画面を見て、その人は驚いた。
《これは、わたしの棋譜ではありませんか》
《えっ？》
　今度はわたしが驚く番・・・・。
　驚きから覚めて、わたしはその人に尋ねる。
《そういえば、あなたフジワラノサイという名前ね。藤原が姓でサイが名前？》
《そうです。にんべんに左で佐、行為の為、物事を為すの為。という説明で分かっていただけますか？》
　わたしは頭の中で文字を思い浮かべる。
《・・・・ああ、佐為ね》
　わたしはその人との間の空間に指で字を書く。
《はい、その佐為です》
《つまり、このｓａｉは佐為、あなただったの？》
　ネット碁で、わたしの美意識に一番かなう棋譜を残してくれた人、その人が今、わたしの目の前にいる。こんな信じられないような幸運、信じよう。もちろん、佐為と名乗るこの人の話も、幽霊としての存在も、すべて信じよう。
《どうなさいました？》
　しばらく呆然としていたわたしに佐為が声をかける。

《あっ、ごめんなさい。ちょっとボーッとしてた・・・・それよりも、せっかく今、ＷｏｒｌｄＧｏのサイトを開いているんだから、さっそく打つ？》
《やっていただけるんですか》
《いいわよ》
　その人は、まさに飛び上がらんばかりによろこんだ。
《まず、ログインね。アカウント名はｓａｉ・・・・あっ、パスワードか・・・・ねえ、パスワードは？》
《パスワード？　何ですか、それは？》
《ネット碁やってて、パスワードを知らないの？》
《・・・・あの、つまり、そういうことはみなヒカルがやってくれていましたから・・・・》
《そうか・・・・パスワードが分らないとこのアカウントは使えないわね》
《それじゃあ、ネット碁ができないのでしょうか？》
　その人は、さっきの喜びから一転して悲しげな顔になる。
《心配しないで。別に新しいアカウントを作ればいいだけのことよ》
《はあ・・・・》
　どうも、この人は現代の技術に疎いようだ。平安時代の人であれば仕方ないか。
《アカウント名は何にする？　特にお気に入りの名前はある？》
《えっ、いえ、そのようなことを問われても》
〔じゃあ、姓も付けてｆｕｊｉｗａｒａｎｏｓａｉ・・・・だと長すぎるな・・・・では、姓はイニシャルにして、Ｆ．ｓａｉ・・・・うん。これはいいな。デザイン的にも〕
《・・・・あのー、何をなさっているのですか？》
　その人はちょっと心配げに声をかける。
《あっ、ごめんなさい。アカウント名を決めていたの。エフ・サイでいいでしょう？　Ｆ．ｓａｉ　見た目もなかなかきれいだし》
《はあ・・・・》
〔そうか、アルファベットには慣れていないんだ。ともかく、すぐに対

局したがっているんだ、さっさとアカウント作成を終わらせよう。パスワードはｒｕｍｉ２０１２でいいだろう・・・・」
　わたしはサクサクと作業を進めたけど、「段位の自己申告」という項目で入力作業の手が止まった。注意書きを読むと、ＷｏｒｌｄＧｏには２０級から８段までの段位があって、最初は自己申告とのこと。ただし、実際に対局を始めて、勝敗から推測される実力が自己申告を下回っていれば、容赦なく段位が下がり、上回っていれば段位が上がる。基本的に自分が対戦を申し込めるのは自分の段より４段上までとのこと。弱い参加者がむやみに強い参加者に対局を申し込むのは、申し込まれる側にとって迷惑だから作られた規定らしい。わたしはその人に事情を説明する。
《では、８段と申告してください》
「・・・・すごい自信・・・・でも、ｓａｉなら当然か・・・・」
　ともかく、アカウント作成が終わり、晴れて対局。同じ８段を名乗っている参加者にさっそく対局を申し込む。最初の２名には拒否されたけど、３人目は受けてくれた。佐為が指示する場所をわたしがクリックするのだけど、「ホシ」とか「コスミ」とか「ツケ」とか「ケイマ」なんて囲碁用語を言われてもわからないし、３の十一とか８の六とか言われても、碁盤の目をいちいち数えないといけない。結局、佐為がディスプレイの碁盤の目を扇で指してくれることになった。
　佐為はほとんど長考しない。だいたい１分以内に打つ。だから、ディスプレイ上にスピーディーに黒白模様が出来上がっていく。それを見ていて、わたしもうれしい。時おり、はっとする模様が出来上がる。その時は、打つ手をちょっと待ってもらって、その模様を眺めている。
《どうしたのですか？》
《あのね、持ち時間に余裕があるなら、ちょっとの間、これを眺めさせて。とてもきれいな模様だから》
《では、しばらくお待ちしましょう》
　こんな会話がこの対局の間に３回あった。初戦は佐為があっさり勝った。あのｓａｉであれば、当然の結果ね。

《次は？》
《えっ、もう1局よろしいのですか？　先ほど、「1日1時間以内」というようなお話もありましたが》
《いいわ。あなたの作る黒白模様はとても美しいから、もっと見たいの》
《ありがとうございます》
　結局、この日は3つ対局した。3局というのかな。3局打ち終えると、さすがに疲れた。別にわたしが考えているわけではないけど、扇で指された所をクリックするだけでも、けっこう疲れる。
《3回対局すれば、少しは満足した？》
《はい、もちろん。思いもよらぬ幸せです》
《それはよかった・・・・ああ、そうだ。遅ればせですけど、自己紹介しますね。高藤ルミ。１９歳。今年の１０月で２０歳になる。現在、専門学校生。コンピューターグラフィックデザインを勉強してます。だから、あの黒白模様に興味があるの・・・・いや、逆ね。あの黒白模様に興味があったから、デザインを勉強しているんだわ》
　こんな話をしながらわたしの心に、幼い頃の思い出がよみがえった。それを話したくなった。
《幼い頃、まだ小学校に上がる前の頃、こんなことがあったの・・・・》
　わたしの話を聞いて、佐為は笑みを浮かべる。
《お気持ちも分からなくはないのですが、囲んだ石を取るのは碁の一番基本的な決まりですので・・・・》
《そうなのよね・・・・》
《それにしても、たった一度だけあったというあの経験、石を取った碁の模様の方がさらに美しかったという経験、また繰り返されるといいですね》
《うん、期待してるわ・・・・ところで、わたしはあなたを何と呼べばいいかしら。「佐為」と呼んでいいの？》
《もちろん、そう呼んでくださって構いません。以前、ヒカルもわたしをそう呼んでいました》
《じゃあ、佐為と呼ぶね。わたしのことはルミと呼んで》

《・・・・いえ、それはいけません。２０歳といえば立派な大人。大人の女人（にょにん）を呼び捨てになどできません。ルミ様と呼ばせていただきます》
《それじゃあ、わたしも佐為様と呼ばないといけないじゃない》
《そんなことはありません。わたしは佐為と呼んでいただいてかまいません》
　とまあ、こんなことでケンカするのも無駄だから、結局、わたしは佐為と呼び、佐為はわたしをルミ様と呼ぶことになった。ちょっと居心地が悪いけど、じきに慣れるでしょう。佐為は、わたしが声を出して話さなくても佐為には聞こえることを説明してくれた。といっても、心の中を覗かれているわけではなくて、わたしが佐為に話そうと思い浮かべたことは、言葉として口から出る前に佐為に伝わるということ。それなら、一緒に外に出てもいい。誰にも見えない幽霊相手に声に出して会話していたら、はたから見たらキチガイだもんね。
　佐為はわたしの行くところ、どこにでもついてくる。学校にも。わたしに憑いた幽霊だから、当たり前だけど、最初のうちは佐為を背中に感じながら学校の授業を受けるのは変な感じだった。佐為は授業や実習を興味深げに見ている。知的好奇心が旺盛なたちなのかな。
　いつだったか、コンピューターグラフィックスで、画面上の好きなところに点を打ち、直径を入力すれば一瞬で円が描けるのを見て、びっくりしていた。
《こんなの、基本の「き」よ》
《そうなんですか・・・・》
《もっとも、肉筆で正円を描かせるなんて課題を入試に出す学校もあるけどね。バカかと思うよ。コンピューターの方がずっと正確にできる作業をなんで入試に出題するんだろう。機械にできることは機械に任せて、人間にしかできない能力を判定すればいいのに》
《そういうものでしょうか？》
　佐為は首をかしげていた。
　ともかく、こうして毎日いつでも佐為がそばにいる。明眸白皙とはこの人のためにある表現かと思える美貌を見慣れてしまうと、身の周

りにいる同級生の男子や街中ですれ違う男たちがみなブサイクに見えてしまうのは仕方ない。こんな男たちを好きになるなんて、金輪際あり得ない。もともと色恋話には縁が薄かったけど、決定的に縁がなくなってしまった。いつだったか、新聞か雑誌の人生相談の欄で、恋愛に悩み苦しんでいる相談者に、回答者の精神科医が「恋愛は人生の必需品ではありません」と書き、恋（恋人ではなく恋）からしばらく遠ざかるようアドバイスいていた。心から同意するわ。恋なんか、なくても人は生きていける。わたしは生きていける。でも、美はないとだめ。美のない世界では生きていけないと思う。そして、わたしのそばにはたぶん日本一美しい人がいる。

ただ、その類い希な美しさを佐為自身は見ることができない。佐為の姿は鏡に映らないから。ある時、たまたま気がついた。わたしの横か後ろに佐為がいることが当たり前に思えるようになった頃、顔を洗っていて、ふと、背後にいる佐為が鏡に映っていないことに気がついた。

《佐為は鏡に映らないの？》

と、振り返って尋ねるわたしに、佐為はうなずいた。心なしか悲しそう。

《実体のない、ルミ様にしか見えない幽霊ですから・・・・》

《・・・・佐為、こんなきれいな顔を自分で見ることができないのね》

わたしは思わず、佐為の髪を触った。佐為は、はにかむように視線を伏せた。

〔まあ、考えてみたら、美貌は自分で見るためじゃなくて、人に見てもらうためのものかもね。自分で自分の美貌をうっとり眺めるなんて、ナルシシズム、一種の精神病理よね・・・・でも、佐為の美しい顔は、わたしのほか誰も見ることができないのね〕

わたしが眠る時、佐為はベッドの脇にきちんと正座してわたしを見守っている。

《幽霊は眠らないの？》

と尋ねたら、わたしが寝入ると佐為も横になるらしい。

《こんな美しい人に見守られて眠るなんて、なんという幸せ、なんとい

うぜいたく》

と心満たされて、わたしは安らかに眠りに落ちる。

３：Ｆ．ｓａｉの波紋

ネット碁は毎日打っている。これまで負けなし。どこまで連勝記録を伸ばすんだろう。最初のうちは対局を申し込んで拒否されることもあったけど、しだいにそれはなくなった。それどころか、対局を申し込まれるようになった。佐為、いやネット碁ではＦ．ｓａｉだけど、その強さが広く認識されるようになったんだろう。わたしは自分のことのようにうれしい。

ある日、ネット碁対局を終えた後、佐為が尋ねた。

《今さらながらですが、このＦ．ｓａｉ、アルファベットともうす見知らぬ文字の連なり、これには何か意味があるのでしょうか？》

《ああ、これはエフ・サイと読むの。Ｆエフは藤原Ｆｕｊｉｗａｒａの頭文字。それを佐為ｓａｉの前につけたの》

《なるほど、そのような意味があるのですね》

また別のある日、佐為がネット碁を始めて１ヶ月くらいした頃、打つ場所を指示しながら佐為が苦笑いしている。

《どうしたの？》

《ルミ様はお分かりにならないかもしれませんが、この対局すでに勝負がついています》

《佐為の勝ちね》

《圧倒的に、と申し上げてよいでしょう》

《どうして、相手は投了しないの？》

《悔しいんでしょうね。負けを認めるのがいやで、ひたすら意味のない手を打ち続けています》

《佐為がやめることはできないの？》

《わたしが負けることにして投了すれば、やめられます》

《そんな・・・そうか、それを狙ってるのね。佐為が根負けして投了したら自分が勝てるという魂胆ね》

《そうかもしれませんね》

《続ける？》

《このような輩に勝ち星を進呈するのも、癪に障ります》

《確かに・・・・》
　わたしはふと、あることを思いついた。
《ねえ、それなら、わたしに遊ばせてくれない？　わたしに打たせてくれない？　いや、「打つ」という言い方は正しくない。好きなところに石を置かせて》
《かまいませんが、どうして？》
《佐為も知ってのとおり、わたしは碁のことは何も分からない。ただ、黒石と白石が作り上げる模様を美しいと思って眺めているだけ。今、この模様が、わたしの美意識でもっと美しくなるよう、石を置かせてほしいの。といっても、白石だけだけどね。黒石は相手が打つから》
　佐為はわたしの突拍子もない申し出に一瞬戸惑ったけど、わたしの意図を理解してほほえんでくれた。
《いいですよ。ルミ様がどのような打ち方をなさろうと、今から形勢が逆転するはずはないと思います。万が一、そうなりそうな時にはわたしが声をかけます》
《ありがとう》
　わたしは盤面の黒白模様を眺め、「ここ」と思う場所をクリックする。そこに白石が1個置かれた。それからしばらく、相手は打ってこない。
《どうしたの？》
《長考しているのでしょう》
《えっ、わたし、相手を長考させるような、そんなすごい手を打ったの？》
《そうではありません》
　佐為は扇で口元を隠してそっと笑う。
《ルミ様があまりに突拍子もないところに石を打つものだから、相手が不気味に思っているのです。相手はわたしの力量を知っています。それほどの力量のある者の打ち込みとして、きっと深い意味があると思い込んで、その意味を懸命に考えているのですよ》
　わたしは思わず吹き出しそうになり、小さな声で
「バカ！」

とつぶやいた。そうしているうちに、相手はやっと黒石を打ち込んできた。石が１つ置かれるごとに模様は微妙に変わる。微妙に変わった模様をより美しいものにするために白石をどこに置くのが最適か、それを考えてわたしは次の白石を置く。相手はまた考え込んだけど、先ほどのような長考はせずに打ち込んできた。それにわたしが白石を打ち返す・・・・１０手ずつくらい打った後、わたしは後ろを振り返って佐為に語りかける。

《大丈夫？　形勢が悪くなっていない？》

《大丈夫ですよ。先ほどから形勢は悪くなってはいません。ルミ様、しっかり形勢を守っておられますよ》

《それは意外・・・・》

佐為とわたしは互いを見合いながらフッと笑った。こうして、結局最後までわたしが打ち続け、途中の優勢を保ったまま佐為Ｆ．ｓａｉの勝ちとなった。わたしはすべての石を打ち終えた碁盤の黒白模様を眺めている。

〔うん、悪くない・・・・〕

そこには、美しい模様を作れた満足感だけでなく、底意地の悪い相手を逆にからかってやった満足感もある。

《ああ、おもしろかった・・・・ねえ、佐為、しょっちゅうとは言わないけど、たまに、この相手と対局してくれない？　わたしも楽しめるから》

《ルミ様も意外と人が悪い・・・・まあ、たまになら、よろしいですよ》

というわけで、２週間ほどしてその相手に対局を申し込んだら、拒否された。

《なんで？》

《前回、わたしたちがあまりに非常識な碁を打ったからでしょう》

「非常識はそっちの方じゃない！」

怒った口調でパソコンディスプレイに話しかけるわたしを見て、佐為は笑った。声を出して笑った。ふだん、佐為は笑う時も上品に扇で口元を隠して声を出さないように笑うのだけど、この時は声を出して笑った。初めてのことかも。

《佐為、そんなにおかしい？》
《いえ、失礼しました。申し訳ありません》
《別に、謝らなくてもいいんだけど・・・・》
　こんなことがあってから間もない頃、ついにあの出来事が再来した。囲われた石が剥がされる、その後の方が剥がされる前より美しいと思った出来事、幼年時代、たった1度だけ遭遇した出来事、それに再び遭遇した。その瞬間、わたしはディスプレイに見とれた。ふだんと違うわたしの様子を佐為も感じ取ったらしい。
《ルミ様、どうなさいました？》
《美しい・・・・》
《えっ？》
　わたしは、その黒白模様をずっと眺めていたかった。だけど、石を取られた相手はそんなわたしの思いなどお構いなしに次の手を打ってきた。一瞬生まれた美は、一瞬のうちに変形してしまった。
　対局が終わって、わたしは佐為に話しかける。
《さっき、ついにあの出来事が起きたの。囲われた石が剥がされた後の方が剥がされる前より美しかった、あの出来事》
《それは、すばらしい》
《うん・・・・でも、すぐに相手が打ってきた。わたしたちが石を取られたのなら、佐為に待ってもらうことができるけど、相手の石を取った場面だと、相手に待ってもらうことはできないのよね。はかない美だったわ》
　佐為はしばらく考え込んで、わたしに語りかける。
《ルミ様、それほど美しいと思われたのでしたら、その模様をちゃんと覚えておられますね？》
《うん。今も印象に残っている》
《ご自身の記憶力を信じてくださいませ。ほんとうに心から美しいと思ったものであれば、たとえ一瞬にして消え去ったとしても、その美の印象はこれからずっと何年も何十年もルミ様の心に留まっているはずです》
　わたしは佐為の言葉を心の中で反芻する。

〔そうね・・・・もし、忘れてしまうとしたら、しょせん忘れてしまう程度の美だったということね・・・・佐為、ありがとう。わたし、自分の記憶力を信じることにする。ほんとうに心に焼き付いた美は、忘れはしないはずね〕

佐為と出会い、佐為の対局を目の前で見るようになって、わたしの黒白模様の探求は一歩深まった。それまでも、機会あるごとに黒白模様は作っていた。だからこそ、ユカがＷｏｒｌｄＧｏのサイトを教えてくれた。でも、佐為との出会いはわたしの探求をより深く、広いものにした。

佐為の代わりに石を置く中で、黒白模様の成長を体感できる。できあがった棋譜を見るだけでは実感できない、模様が複雑な結晶のように成長していくプロセス。それは数多くのインスピレーションのもとになった。

そして、形式を広げることも思いついた。たとえば、碁盤は正方形だけど、デザインを作るキャンバスはほかの形でもいいかも。縦長の長方形、横長の長方形、三角形、六角形・・・・。石の形を変えてもいい、円形だけじゃなくて、方形、三角形、六角形・・・・。石の大きさを変えてもいい。ほかの石より大きな石を何個か置いてもいい。そして、碁盤の色も木地色に限らなくてもいい。石を置き終わったら格子線を消してもいいかも・・・・。

わたしは思いつくいろんなバリエーションを試みた。その果てに、わたしになじむ形式、制約が分かってきた。無制約の自由は美を生まない。それは、直感的に分かっていた。芸術が美を生むには形式という名の制約が要る。俳句なら五七五、短歌なら五七五七七という文字数の制約。音楽なら和声や対位法の規則、そしてソナタ形式のような楽章展開のルールなど。形式を守ることで高められる美。わたしにとってどんな形式が最適なのか、この試みの中から少しずつ見えてきた。

キャンバスの形はやはり正方形に落ち着いた。石の形も円形が一番しっくりいく。

石の大きさを変えるのはおもしろい発想だと思えた。ただし、あま

りいろんなサイズの石が混じるのは均衡に欠けて美しくない。結局、サイズは2種類。基本のサイズと、それより何倍か大きいサイズの2種類に限り、大型の石は黒白それぞれ5個まで、かつ黒白同数にした。それがわたしのシンメトリー感覚にかなう。

碁盤の色は、さまざまな色を使える。濃淡さまざまな青や赤や黄色、その他・・・・。ただ、わたしが好んで使う色はいくつかに絞られた。まず、自分でも意外だったのが灰色。灰色の盤面に黒白の石。まさにモノトーンの世界だけど、決まればとても美しい。この灰色のほかに、何よりのお気に入りは藤色。もともと好きな色だったけど、黒白模様の背景としてこれほど映えるとは、実際に試してみるまで分からなかった。さらに、色の濃さのグラデーションを付けてもいい。上から下に向かって、右から左に向かって、あるいは斜め方向に、色の濃さを変化させるのもおもしろい。

格子線は、できあがった模様によって、残す方が良い場合と消す方が良い場合がある。最初からどちらかに決める必要はないという結論になった。コンピューターグラフィックスなら、黒白模様を作った後に格子線を消すくらい何でもないから、初めに決めておく必要はない。

わたしがパソコンのディスプレイで作業している時、佐為は背後から、あるいは脇からそれを眺めている。最初のうちは、囲碁の石の配置としてあり得ない配置を見ると、気持ち悪がった。頭痛がする時のような、親指と中指でこめかみを挟むような仕草をすることもあった。

《ルミ様、そのような石の配置はあり得ません・・・・》

《だから、これは棋譜じゃないの。デザインなの》

《それは分かっておりますが、それでもわたしはどうしても棋譜に見えてしまって、そのような石の配置は気持ち悪いのです》

佐為がわたしの作る黒白模様の美しさを理解しないことが残念だった。美しい人は美意識も優れているとは限らない、それはわたしがこれまでの人生で何度か経験したことだけど、佐為もそのような人たちの仲間だとしたら、残念で仕方ない。でも、

《佐為はやっぱり碁バカなのかしら・・・・》
　という心配は、ありがたいことに1～2ヶ月で薄らいだ。その頃になると、佐為もわたしが作る黒白模様を棋譜としてでなくデザインとして見るこつをつかんだらしい。そして、たまに的確な批評をするようにさえなった。
〔やっぱり、佐為は美意識も高いんだ〕
　わたしはうれしかった。
　わたしはもとからインドア派だけど、外の景色を眺めるのも好き。だからこそ、北千住の学校から電車で２０分以上かかる我孫子に住んでいる。１０分も歩けば手賀沼の岸辺、自転車で１０分くらい行けば利根川の河原。ディスプレイを見つめる室内作業に疲れると、その景色を見に外に出る。佐為も一緒に。
　初めて手賀沼を見た時は、
《巨椋池（おぐらいけ）みたいですね。》
　と印象を述べた。巨椋池、高校の古文で習った、京都の南にあった湖。今は干拓で消えてしまったらしい。巨椋池でも手賀沼でも、昔も今も、水面に日が差せば光が反射する。風が吹くと立つさざ波が立ち、陽光が砕ける。
《金波、銀波って、ほんとうにあるのね。今はまだ日が高いから銀波でしょう。もうちょっと日が傾いて陽光が赤みを帯びると金波になるのよね》
《そうですね。そのありさまを歌に詠んだりしたものでした・・・・》
《・・・・そういえば佐為、こんなこと、したことある？　瞼を狭めていくの。そうすると視野が暗くなるでしょう。やがて背景の物の形が識別できなくなってしまうの。その暗い背景に光の粒だけが明るく輝いている・・・・やってごらん》
　佐為はわたしの言うとおりにした。
《ほんとうに、ほの暗い世界に光の粒が踊っているようです》
　利根川の河原を見た時は、
《大きな川ですねえ。鴨川の何倍も広い》
　と驚いていた。平安時代の貴族の例に漏れず、佐為も都の外にはほ

とんど出たことがなかったようだ。
《わたしの故郷には筑後川という大きな川があったの。だから、ここに来ると懐かしい気がするの》
《筑後川・・・ああ、ルミ様は筑紫の国で生まれ育ったのですね。大人になって都に出てこられた。玉鬘（たまかずら）のようですね》
〔えっ・・・・、いや、わたし、そんな美人じゃない・・・〕
　ちょっと気持ちが混乱しかけた。こういう時は話題を変えよう。
《・・・子供の頃、よく堤防の上から景色を眺めていた。河原の向こうの平野に田んぼが広がっていて、その向こうに薄い山並みが見えるの・・・》
　そして、わたしは、子供の頃思っていたことを佐為に語る。
《どんなにうまく描いても、絵よりも実物の風景の方がきれい。それなら、絵を描くより風景を眺めている方が楽しいじゃない。どんなにうまく描いても、絵よりもほんものの人の方がきれい。だったら、絵を描くよりその人と会う方が素敵じゃない》
　わたしは佐為を見つめる。佐為は恥じらうように目をそらした。
　こんなふうに、佐為がネット碁で連勝を続け、わたしが黒白模様のさまざまなバリエーションを試み、時おりは外に散歩に出かけたりしていた頃、ネット碁の世界だけでなくリアルの碁の世界でも、F・saiの存在が波紋を広げつつあったとは、うかつにも思い及ばなかった。

／／／／／／／／／／／／／／
／／／／／／／／／／／／

（ここから視点変換）
　佐為がネット碁に再生して1～2ヶ月もすると、無敵のF・saiはネット碁の世界に知れ渡った。saiが消えて10年、すでにsaiを知らないネット碁ユーザーも多く、最初は「無敵」ということで話題になったのだが、いずれsaiと対局経験のある参加者の目に留まることになる。彼らにとって、F・saiとsaiの類似は明白すぎるほどだった。単にアカウント名が似ていて同じくらい強いというのではなく、その手筋、打ち方が瓜二つなのだ。

「ｓａｉが復活した。ｓａｉがネット碁に戻ってきた」
「でも、どうしてｓａｉの名前じゃないんだ？　Ｆ．には何の意味があるんだ？　まさかＦａｌｓｅじゃあるまいし」
　こんな噂が飛び交った。その噂に敏感に反応したのは、アマチュアよりもむしろプロの棋士たち。
「Ｆ．ｓａｉはｓａｉの再来なのか。ならばぜひ打ってみたい。１０年前のように突然消えてしまう前に」
　この年の７月頃から、Ｆ．ｓａｉにプロからの対局申込みが増え始めた。もちろん、Ｆ．ｓａｉは相手がプロかどうか分らない。ただ、これまで自分に対局を申し込んできた者たちより明らかに強い相手からの申込みが増えたと感じる。それは、神の一手の探求のためには望ましいことである。そして、いずれの対局者もＦ．ｓａｉに敗れ去った。
　緒方は塔矢邸で自分がＦ．ｓａｉと対局した棋譜を塔矢行洋に見せている。
「先生、これは明らかにｓａｉの手筋ではありませんか？　わたしは棋譜を見るだけでｓａｉと実際に対局したことはありません。先生は一度だけｓａｉと対局されました。先生がご覧になって、いかがですか？　ｓａｉに間違いありませんか？」
　行洋は差し出された棋譜を見つめる。確かに、それは１０年前ネットを通して対局したｓａｉの手筋そのものに思える。しかし、
「もし、このＦ．ｓａｉがｓａｉであるのなら、なぜ名前を変えたのだ？　確かに、ｓａｉはみごとな打ち手であった。単に強いというだけでなく、美しい碁を打つ。彼との対局はわたしにとっても最良の思い出の一つだ。しかし、それでも、ネット碁しか打たない、現実の棋界にいっさい現れようとしないことに、一抹のいかがわしさを覚えざるを得ないのだ。まして、今度は名前を変えるとは。なぜ、目の前に現れない？　なぜ名前を変える？　世をはばかるやむを得ない事情があるのかも知れないが、それでも、どうしても疑念が残るのだ」
「では、先生はＦ．ｓａｉと対局なさるつもりはない？」
　行洋は腕を組んで考え込んだ。

棋院で、院生時代からの友人である和谷に棋譜を見せられた進藤ヒカルは、青ざめた表情を悟られないようにうつむいている。そんなヒカルに構うことなく、和谷は熱心に話す。

「進藤、これぜったいｓａｉだぜ。間違いない。オレ、昨日対局したんだ。圧倒的な強さだぜ。まさに１２年前にオレが対局して粉砕されたｓａｉそのもの。強さだけじゃない。打ち方がそっくりなんだ。ｓａｉがネット碁に戻ってきたんだ。名前を変えた理由は分んないけど」

ヒカルには和谷の言葉はほとんど耳に入らない。ただ心の中でつぶやく。

〔佐為、どうしてほかの人なんだ？　どうして、オレのところに戻ってこなかったんだ？　なぜなんだ？　今、どこにいるんだ？・・・・〕

ヒカルには、ｓａｉが名前を変えた理由も分る。

〔アカウントのパスワードが分んなかったんだ。だから、新しい名前で新しいアカウントを作ったんだ。Ｆ．はフジワラの頭文字だ〕

４：再会

（ここからまたルミ視点）

夏休みが終わったばかりの９月上旬、わたしはいろんな黒白模様の形式を試し続けている。探求は佳境に入っていた。昼休みになっても学校のパソコンの前に座ったままのわたしにユカが呼びかける。

「ルミ、来てごらん。日本棋院のサイトよ」

ユカはわたしにＷｏｒｌｄＧｏのサイトを教えてくれた同級生。ひょっとしたら佐為との出会いを取り持ってくれた恩人かもしれないけど、わたしがいくら言っても、わたしがほんとうは碁が好きなんだと信じている。それで、ＷｏｒｌｄＧｏのほかにも、囲碁に関する情報を時々教えてくれる。まあ、わたしにとっても迷惑ではないし、佐為はけっこう喜んでいる。それなら、敢えて誤解を解かず、時々囲碁情報をもらっておこうか。

「プロ棋士って、けっこう若い人が多いのね。おじさんばかりかと思ってたけど」

と言いながら、日本棋院に所属しているプロ棋士たちの顔写真を見ている。全員だと５００人くらいいるらしいけど、このサイトに顔写真が載っているのは高段者とタイトルホルダーだけ。そうやってユカが画面をスクロールしている時、背後で佐為が《ヒカル！》と叫んだ。画面には本因坊のタイトルホルダーである進藤ヒカル氏の顔写真が掲示されている。後ろを振り向くと、佐為が涙を流している。わたしも思い出した。佐為が最初の日に語ってくれた物語。わたしの前に憑いていた少年の名前が確か進藤ヒカルだった。あれから１０年、もう大人になっているけど、佐為は一目見てすぐに分かったらしい。

《佐為、ここは学校なの。気持ちは分かるけど、騒がないで。うちに帰ってゆっくり見せてあげるから》

佐為は気持ちを抑えるようにうなずいた。

部屋に戻って、パソコンを立ち上げる。日本棋院で検索するとすぐにそのサイトは見つかった。そして、進藤ヒカル氏の顔写真とプロ

フィールも。６年前に本因坊を獲得し、以来ずっとこのタイトルを守り続けている。ほかに棋聖のタイトルも保持している。同年の塔矢アキラと並んで若手の２枚看板とされている。そんな進藤ヒカル氏の顔写真を佐為はじっと見つめている。もはや涙を流したりはしない。ただ、その視線が熱い。わたしが言葉を掛けるのがためらわれるほど。

わたしよりずっと縁が深いんだろう。わたしは佐為に出会ってまだ４ヶ月。進藤ヒカルとは２年を過ごした。期間の長さだけじゃない。その密度も。わたしは佐為に代ってネット碁を打つだけだけど、進藤ヒカルには囲碁を一から教え込んだんだ。佐為の弟子、たった一人の弟子。思いが深いのは当たり前・・・・でも、ちょっとばかり嫉妬を感じる。これはこれで、仕方ないよね。

しばらくそうやって見つめていて、佐為はフッと息を漏らした。それまでの張り詰めた空気がちょっとばかり緩んだよう。

《懐かしい？　もちろん、懐かしいよね》

わたしが語りかける。

《はい。ほんとうに懐かしい・・・・でも、ヒカルはすっかり大人になりました。わたしが別れた時は１４歳か１５歳くらいでしたから》

《でも、佐為のことはぜったい忘れていないはずよ》

《もちろん、そうだと思います》

《会いたい？》

佐為はうつむいて考え込む。どれくらいそうやっていただろう。しばらく考え込んでから、首を振った。そして、ゆっくりと言葉を探すように語る。まるで自分に語りかけるみたいに。

《いえ、会わない方がいいでしょう。あれから１０年、ヒカルは自分の碁を作り上げたはずです。ヒカルは前を向いているはずです。後ろを振り向かせるようなことは、しない方がいいでしょう。振り返っても、あの時は戻ってこないのだから。気持ちは戻るかもしれません、でも時は戻らない・・・・》

こんな佐為の言葉にほっとするわたしがいる。

でも、佐為の気持ちとは別に、わたしの気持ちとも別に、進藤ヒカ

ルとの再会は避けようがなかった。
　ネット碁の対局申込み。この頃、佐為はほとんど自分から対局を申し込むことはなくなっている。ＷｏｒｌｄＧｏのサイトにアクセスすればすぐに対局が申し込まれるし、１局終われば すぐに別の誰かから対局が申し込まれる。そんなふうにして、この対局も始まった。最初の数手を打って、佐為はわたしに話しかける。
《この者は手強いです。これまで対局した相手の中でも一二を争う強さです》
　佐為は強い相手と打つのを喜ぶ。それは碁打ちとして当然な気持ちなんだろう。最善の一手、佐為の言い方では「神の一手」の探求のためにも、強い相手と打ち合う方がいいだろう。だから相手がとても強いと分った時、佐為の指示に従ってマウスをクリックするわたしの背後から、強者と打ち合う喜びと緊張感、そして神の一手を目指す熱意が伝わってくる。今日はいつもにも増してそうだ。しばらく対局が進んで、佐為の手が止まった。振り向くと表情が固まっている。
《佐為、どうしたの？》
《ヒカル・・・・》
《えっ？・・・・》
　佐為は、わたしが見つめているのに気づいた。そして我に返ったように、わたしに説明する。
《間違いありません。これはヒカルです。この手筋はヒカル以外に考えられません》
　佐為の頬に涙が流れている。わたしは何も言えず、佐為を見つめる。佐為はディスプレイに向かって語りかける。
《ヒカル、強くなりましたね。ほんとうに強くなりました。１０年ですからね。強くなりますよね・・・・》
　ここで佐為の言葉が途切れる。わたしは待っている。
《・・・・でも、まだわたしにはかなわないはず・・・・》
　しだいに佐為の表情が引き締まってくる。いつもの対局の時の佐為の表情に戻った。
《よろしい。受けますよ。今のヒカル、かかっておいで。存分に打ち

合いましょう》
佐為は、ディスプレイの碁盤の一点を扇で指した。
・・・・結果は佐為の勝ち。でも僅差の勝利だったらしい。対局を終えて感慨にふける佐為。わたしはしばらく黙って待っていた。それから話しかけた。
《佐為、碁を打っていて、相手が誰だか分るものなの？》
《これまで何度も打ち合った相手であれば、その手筋から、誰だか分ります。ましてヒカルの手筋は、けっして忘れはしません》
《それならきっと、ヒカルさんもさっきの対局の相手が佐為だったって、気づいているよね》
《もちろん、そのはずです》
《それなら・・・・》
わたしは言葉を継ぐ。
《佐為はヒカルさんに会う方がいいよ。会うべきよ》
佐為はわたしを見つめる。
《だって、お互い分っていなかったのなら、会わないでいてもいいけど、もう分ってしまったんでしょう。ヒカルさんは佐為が戻ってきたことを分ったのよ。たぶん、今日じゃなくてもっと前から分っていたのよ。分っていて、Ｆ．ｓａｉが佐為だと知って対局を申し込んだのよ。そして、対局して間違いなくＦ．ｓａｉが佐為だと分ったはずよ。それなのに無視し続けるなんて、かわいそうよ。ヒカルさんの気持ちになってごらん・・・・》
佐為は黙ってうつむいている。
《それに、ヒカルさんからはわたしたちに連絡のしようがないのよ。だって、どこにいるか分んないもの》
《ルミ様は、ヒカルに連絡のしようがあるのですか？》
《そりゃあ、日本棋院気付　進藤ヒカル様で手紙を出せば確実に届くわ》
・・・・ああ、結局、佐為がヒカルと会う手助けをすることになった。でも、これでいいよね。前世（？）からの縁のある二人、邪魔しちゃいけないわ。それに、無理に会わないでいると佐為が辛い思いを

するのは目に見えているし、佐為が辛い思いをするのを見ているのは、わたしも辛いから。
手紙にはごく簡単なことだけ書いた。今年の5月に佐為がわたしに憑いたこと。詳しいことは直接会って話したいこと。そのために、会える日時と場所を進藤ヒカルさんの方からいくつか提示してほしいということ。
手紙を出して、3日後には返事が来た。きっと、受け取ってすぐその場で返事を書いたんだ。そして、翌週の金曜日の夕方、わたしが学校を終えて、市ヶ谷の日本棋院に会いに行くことになった。地図で調べると、棋院のそばに個室（会議室）のある喫茶店がある。〔ここがいい〕と思った。
北千住から地下鉄で御茶ノ水に出て、ＪＲに乗り換えて3つ目。駅から棋院まで歩いて5分もかからない。
進藤ヒカルさんは棋院の入り口で待っていた。あの特徴的な明るい色の前髪ですぐに見つけられた。
「進藤ヒカルさんですね。わたし、高藤ルミです」
「あっ、初めまして」
ヒカルさんは、突然声を掛けられてあわてたみたい。
「じゃあ、こっちへ」
とわたしは歩きだす。
「どこに行くの？」
「この近くに個室のある喫茶店があるんです。前もって調べておきました」
「そうなんだ・・・・しっかりしてるね」
ヒカルさんはわたしを見て話すけど、わたしの反対側を一緒に歩いている佐為には気がつかないみたい。見えていないんだ。
喫茶店に入り、予約していた個室に通される。ドアを閉めて、ヒカルさんと向き合う。ヒカルさんが先に話を始めた。
「佐為はいるの？」
「います。わたしの右隣に」
ヒカルさんの表情がみるみる暗くなる。

「見えない」
　ヒカルさんがぽつりとつぶやく。右を見ると、佐為も悲しそうな表情。
《佐為、ヒカルさんに何か話しかけてみて》
　佐為はヒカルさんの方を向いて話しかける。
《ヒカル、久しぶりです。１０年ぶりですね》
　ヒカルさんは反応しない。聞こえていないんだ。佐為はまた悲しそうな顔をする。
「ヒカルさんには、佐為の姿は見えないし、声も聞こえないんですね」
　ヒカルさんは、がっかりしたようにうなずく。
「どうしてなんだ？　どうして、オレじゃないんだ？　オレに戻るはずじゃないのか？　どうして、ほかの人なんだ？」
　ヒカルさんと佐為がうなだれる。そして、わたしは意を決する。さあ、高藤ルミ、２０歳。元文学少女、現美術女子の知識と意地と見栄を総動員して、精いっぱい背伸びして、ヒカルさんに相対するんだ。
「なぜ、ヒカルさんでなく、わたしなのか？　それは、佐為のためよ」
　ヒカルさんが顔を上げて、わたしを見る。激しい視線でわたしを見つめる。反発や怒りさえ秘めたその視線をわたしはしっかり受け止めて話し続ける。
「佐為は今、ネット碁を打ってます。ご存知ですよね。佐為にはそれが必要なんです。佐為がこの世に留まる目的は最善の一手、神の一手の探求です。そのためには佐為が打たないといけない。でも佐為は体を持っていない。だから佐為の代わりに、佐為の指示の通りに碁盤に石を置く人間が必要です。その役目には、ヒカルさん、あなたではなく、わたしの方がずっと適任なんです。なぜなら・・・・」
　何か言おうとするヒカルさんの機先を制して、わたしは畳みかけるように語り続ける。
「わたしは碁に興味がないからです。わたしは碁を打ちたいという欲求がないからです。だから佐為が望むままに、佐為の言うとおりに碁盤に石を置くことができます。ヒカルさんはそうじゃない。ヒカルさんは人に言われるままに石を置くのではなく、自分の碁を打ちたが

る。ヒカルさんは佐為の代理人にはなれないのです。なれないだけじゃない。なってはいけないのです。ヒカルさんは佐為の代理人になってはいけないのです。なぜなら・・・・」

ここでも、何か言おうとするヒカルさんの機先を制して、わたしは語り続ける。

「なぜなら、ヒカルさんは佐為の弟子だからです」

ここまで言い切った。ヒカルさんは、じっとわたしを見ている。何かを言おうとするのではなく、次にわたしが語る言葉を待っている。

「弟子の役目は、師のコピーになることではありません。師の技能、師の思想を受け継いで、自分のオリジナルを新たに作りだし、それを世に送り出すことです。ヒカルさんは佐為の弟子です。唯一の弟子です。佐為が語ってくれました。わたしの目の前に初めて現れた時、語ってくれました。佐為はヒカルさんを育てたんです。佐為は自分の持っているすべてをヒカルさんに注ぎ込んだんです。何のため？

ヒカルさんを最良、最強の棋士に育てるためです。それがどれほど贅沢なことか、ヒカルさん、考えたことある？　無敵の佐為の教えをただ一人受けたのよ。無敵の佐為のすべてを受け取ったのよ。そんなヒカルさんは、佐為の唯一のそして最愛の弟子であるヒカルさんは、自分の碁を打たないといけないの。それが佐為のためなの。それが、ヒカルさんにすべてを注いだ佐為の思いに報いることなの。間違っても、自分を捨てて佐為の代理人になろうなんて、思っちゃいけないわ」

わたしは、この時のために何日も前から練り上げ用意しておいた口上を語りきった。高藤ルミ、一世一代の大口上。

ヒカルさんはじっとわたしを見ている。熱のこもった視線。でも反発や怒りは影を潜めた。そして佐為がわたしに語りかける。

《ルミ様。ありがとうございます。わたしがヒカルに言うべきことをすべて言ってくださいました。ほんとうならわたしが言うべきであったこと、でも、ヒカルへの情のために、そして・・・そして、自分の碁を打ちたいというわたしの欲のために、言い出せないままだったことを、わたしに代わって言ってくださいました。ありがとうござ

います》
　この言葉がヒカルさんに聞こえるはずはない。でも、ヒカルさんは何かを感じたのかもしれない。目の色から熱が去り、悲しみが差した。それまでわたしに向けていた視線を下に向け、ぽつりとつぶやいた。
「アンタの言うことは正しい。でも、オレは悲しいよ」
　しばらく、沈黙が部屋を満たす。わたしはその場で思いついたことを口にした。
「成長するって、何かを失うことなの。人は、成長するためには、それと引き替えに何かを失わないといけないの」
　わたしは、自分の幼年時代を思い起こしている。祖父の碁を無心に眺めていた幼年時代。成長と引き替えに失った静かで満たされた日々・・・・。ヒカルさんは黙ったまま何か考え込んでいる。しばらくして、フーッとため息をついた。
「分ったよ。悲しいのは悲しいけど、どうしようもないことだよな・・・・オレはオレの碁を打ち続ける。それが佐為のためにオレができることだよな」
　佐為はヒカルさんを見つめている。そのまなざしには、愛情と悲しみ、そして安堵も混じっている？
「だけど、もしできるものなら・・・・これからネット碁だけじゃなくて、佐為とじかに対局させてくれないか？　しょっちゅうでなくてもいい。たまにでいいから」
　ヒカルさんは、静かな寂しげな視線をわたしに向けて、落ち着いた声で語った。ちょっとばかり悲しみが残っている口調だったけど。
　帰りの電車の中で佐為がわたしに話しかける。
《ルミ様は、ほんとうに大人ですね。そして、びっくりするほど肝が据わっておられる》
　わたしはちょっと笑いを漏らす。
《精いっぱい背伸びしたのよ。全力の２割増し、５割増し、１０割増しくらい頑張ったの。だって、わたし、今の暮らし、佐為と一緒の今の暮らしを失いたくないもの。だから、ヒカルさんにも納得してほし

かったの。ヒカルさんが今のわたしの暮らしを脅かさないように・・・・まあ、そういう打算だけじゃないとは思いたい。打算のほかに、ヒカルさんのことを純粋に気遣う気持ちも心の片隅にあるとは思いたいけど》

わたしは佐為を見つめる。佐為もわたしを見つめ返す。わたしはまた語り始める。

《わたしだって、ヒカルさんが不幸になればいいなんて思っていないわ。幸せになってほしい。佐為に縁深い人なんだから。不幸になってほしくない。でも、わたしたちもこのまま幸せでいたいの。だから、どちらかが犠牲になるような関係、ヒカルさんが幸せになるならわたしたちが不幸になるとか、わたしたちが幸せでいるためにはヒカルさんを不幸にしなきゃいけないとか、そんな関係になりたくないの。だから、ヒカルさんに納得してほしかったの。佐為がヒカルさんじゃなくて、わたしに憑いたことを。その方が、お互いのためだってことを。・・・・今日の口上、何日も前から必死で考えたのよ》

佐為はゆっくりうなずいた。その表情には、わたしへの感謝の気持ちと、わたしをいたわる気持ちがにじんでいる。

5：三人

「これからネット碁だけじゃなくて、佐為とじかに対局させてくれないか」というヒカルさんの願い、もちろん叶えてあげたい。ただ、本因坊のヒカルさんは、アイドルタレントや一流Ｊリーガーほどではないけど、それなりに有名人。人目に付くところで打つのは、目立ってしまう。「あれは進藤本因坊じゃないか。相手は誰だ？」みたいな噂にはなりたくない。いろいろ考えて結局、とりあえず１回目はヒカルさんの家に伺うことになった。

この頃には、メールアドレスを交換しあって、メールで連絡を取り合うようになったけど、ヒカルさんの家はうちからさほど遠くはなかった。北千住からバスで１５分くらい。

その日はバス停まで迎えに来てくれることになっていた。バスを降りると、そこにヒカルさんが待っている。

《珍しい、ヒカルがちゃんと時間どおりに来ている》

《えっ？・・・・ヒカルさんって、そんなずぼらな人なの？》

《あっ、いえ・・・・》

佐為はあわてて否定する。

《それは子供の頃の話です。いまは立派な大人になっているのでしょう》

ヒカルさんは、わたしと佐為の会話は聞こえないはずだけど、何となく気配を感じたみたい。

「ひょっとして、佐為と何か話してた？」

「えっ・・・・」

わたしは、思わず佐為の方を向いた。

「まあ、オレに聞かせたくない話なら、聞かなくてもいいけど」

ヒカルさんは笑いながら話しかける。わたしは、隠すほどのことではないと思って話すことにした。

「うん、ヒカルさんがバス停で待っていたのを見て佐為が『珍しい、ヒカルがちゃんと時間どおりに来ている』って言ったの」

ヒカルさんは愉快そうに笑った。

「まあ、そう言われても仕方ないよなあ」
《ルミ様、その後でちゃんと「いまは立派な大人になっているのでしょう」と言ったんです。それも伝えてください》
　と話す佐為の真剣な顔がおもしろい。
《はい、はい》
「佐為は、その後でちゃんと『いまは立派な大人になっているのでしょう』とも話してくれたから」
「うーん、立派な大人になってるかなあ・・・・」
　ヒカルさんはまた笑う。
　こんな話をしながら、ヒカルさんの家に着いた。今日の様子を見る限り、ヒカルさんは、佐為が自分のところに戻ってこなかったことも、佐為の姿が見えず声も聞こえないことについても、吹っ切っているみたい。・・・・いや、そう簡単に吹っ切れることではないよね。わたしたちの前で吹っ切れたような態度を見せてくれてるだけなんだ。でも、それでもわたしはうれしい。
「さあ、着いた。ここだよ」
　とヒカルさんが示すのは、昔風のけっこう立派な木造家屋。それを見て佐為が驚いた口調で語る。
《これは、ヒカルのおじい様の家では？》
「佐為が・・・・」
「これはじいちゃんの家だって言ってんだろう？」
「はい」
「昔はそうだった。じいちゃんが死ぬとき、遺言でオレに譲ってくれたんだ。オレがプロの碁打ちになったのがうれしかったんだろうなあ。じいちゃんは碁が好きで、けっこう強かった。地区のアマチュアの大会で優勝したこともあるんだ。オレの両親はどっちも碁に関心がない人だったから、孫のオレが碁打ちになったのがなおさらうれしかったんだろう。まあ、それだけが理由かどうか分からないけど、家をオレに譲ってくれた。せっかくだから、住んでるよ・・・・そうだ、先にこっちを見てもらおうか」
　ヒカルさんは母屋の脇の蔵の方に歩いて行く。

蔵の木戸をギーッと開く。ほの暗い中にいろんな物が置かれている。
「こっちだよ」
とヒカルさんは屋根裏に登る階段を指さす。わたしたちは階段を上る。
「これだよ」
と言いながらヒカルさんは古い碁盤をさすっている。
「ひょっとして、佐為が騒いでるんじゃないか?」
「うん、よく分かるね。佐為がすごくよろこんで、驚いている」
ヒカルさんは、見えなくても聞こえなくても、佐為の気持ちが分かるみたい。
「佐為が取り憑いていた碁盤だよ」
「ああ、これが・・・・」
「そう、これだよ」
それから、ヒカルさんはその時のことを話してくれた。
「オレが小学校6年生の秋か冬頃だった。その頃のオレはどうしようもない悪ガキで、学校のテストの成績があんまりひどいんで、親から小遣いを止められてしまった。それで、この蔵で何か売り物になりそうなものを探して小銭を稼ごうなんて魂胆でいろいろ探し回ったんだ。そしたらこの碁盤が見つかった。それなりの値段で売れそうだと喜んだけど、シミが付いてるんだ。よく見ると血の跡なんだ。これじゃあ売れないと思ったけど、一緒に来てた友達は、シミなんか付いてないって言うんだ。『そんなことはない。ここに血の跡があるじゃないか』みたいなことを話してると、佐為が現れたんだ。オレは気を失ったんだけど、気を失った意識の中というのかな、夢の中というのかな、ともかく佐為が自分のことをオレに話してくれた。それが佐為との出会いだよ」
〔ふーん、そんなことがあったんだ。佐為はこれまでヒカルさんのこと、あまり詳しく話してくれなかった。と言うかわたしが興味なさそうだから話さなかっただけなのかな。これからはいろんなこと、話してもらおう〕

「じゃあ、出ようか」
暗い蔵の中から外に出ると、日の光がまぶしい。ヒカルさんは伸びをするように両腕を上げて
「さあ、対局、対局」
と言った。それから、わたしの方を向いて、ふとほほえんだ。
「これは昔の佐為の決まり文句だったなあ。オレを鍛えていた頃、オレの部屋で時間があれば『さあ、対局、対局』ってせかしたっけ」
そんなヒカルさんを佐為は懐かしさを込めて見ている。ヒカルさんも、たぶんわたしじゃなくて、わたしのそばにいるはずの佐為を見ているんだ。佐為は「気持ちは戻るけど、時は戻らない」って言った。それはそうだけど、気持ちが戻るだけでもいいじゃない。過去を振り返ることも、たまにはいいじゃない。二人を見ていて、そう思う。
居間の碁盤をはさんで、佐為とヒカルさんと座っている。わたしは佐為の脇にいる。そうしてほしいとヒカルさんに頼まれた。昔、ヒカルさんが佐為と対局する時はいつもこんなふうに相対し、佐為が扇で示す場所にヒカルさんが碁石を置いていたから。今日はもちろん、佐為の碁石を置くのは横に座るわたしの役目。
向かいに座っているはずの、見えない佐為にヒカルさんがお辞儀する。
「お願いします」
《お願いします》
と佐為が答え、頭を下げる。わたしも
「お願いします」
と礼をした。その瞬間、それまでの穏やかな空気が一変した。対局者どうしの真剣勝負のような気迫がわたしにも伝わる。これは、ネット碁ではほとんど感じられない、実際に相手と向かい合わないと感じられない。佐為も、できるなら、ネット碁だけじゃなくて、こういう現実の対局もしたいんだろうなあ。でも、それをすると、わたしが「無敵の棋士」に見られてしまうんだよなあ・・・・昔、佐為とヒカルさんもこれで悩んだんだよね・・・・とりあえず、今はヒカルさんだけだね。それなら月1回くらいは会えるよう、何か方法を考えよ

う・・・・。
　ネット碁に比べると、二人ともゆっくり時間を取って考えている。だからわたしも、その時その時の黒白模様をじっくり眺めていられる。短い時間のうちに模様が変化していくのを見てるのもおもしろいけど、こうやって1つ1つの模様をじっくり見るのも、おもしろい。・・・・ずいぶん時間が経ったような気がするなあと思っていると、ヒカルさんの表情が緩んだ。そして時計を見て
「あっ、もうとっくにお昼を過ぎてる。打ち掛けにしよう」
「打ち掛け？」
「うん、まあ、昼休みのことだよ。腹減ったろう。何か食べよう」
「ああ、もうそんなに時間が経ったのね」
「外に食べに行くか、近くのスーパーで何か買ってくるか・・・・うちにあるのはカップ麺くらいだからなあ」
「わたしはカップ麺でいいよ」
「それでいいの？」
「うん。わたしは別に構わないよ」
「じゃあ、外に出るのも面倒だから、そうさせてもらう」
　ヒカルさんはカップ麺を2つ作って持ってきてくれた。一緒にいただく。
《ヒカルは、今もラーメンが大好物なんですね》
「ヒカルさん、昔からラーメンが好きだったの？」
「うん。ラーメンさえあれば幸せって感じ。佐為はオレがラーメン食ってるのしか見たことないんじゃないかな」
《そんなことはありません。棋院のそばのハンバーガーショップにもよく出かけてたじゃないですか》
「棋院のそばのハンバーガーショップにも・・・・」
「ああ、そうだった。院生の頃、入り浸ってた。和谷とか伊角さんとかと一緒に」
　懐かしそうな表情のヒカルさん。佐為も。さっきの張りつめた雰囲気と、このまったり感。落差がすごい。
「棋士って、みんなこうなの？」

「こうなのって・・・・」
「ああ、ごめんなさい。省略が多すぎたね。つまり、さっきの対局中の雰囲気と、今この雰囲気の落差が大きすぎるから、棋士ってみんな、こんなふうに対局中とそれ以外の時で雰囲気ががらっと変わるのかなって疑問に思ったの」
「まあ、そうだな。対局中のギリギリ真剣な気持ちをほかの時にも保ってはいられないな・・・・でも、あいつはふだんから生真面目そのものだな」
「あいつ？」
「ああ、塔矢アキラっていうんだ。オレの生涯のライバル。あいつはふだんから真面目な顔してそう」
　脇で佐為が笑っている。
「さて、そろそろ再開しようか」
　ヒカルさんは立ち上がる。わたしも立ち上がって、居間に移動した。そして、対局中の緊迫した雰囲気が戻ってきた。
　対局が終わったのは夕方、暗くなりかけていた。今日も佐為が勝ったけど、かなりきわどかったらしい。
「あと一歩が足りないなあ。悔しいけど、まだ佐為の方が役者が上だ」
《でも、今日の対局でも、何度かひやりとさせられました。ヒカルがわたしに1勝する日は近いでしょう。わたしに勝ち続けるようになるのは、遥か先のことですが》
《それ、ヒカルさんに伝えていいの？》
《もちろん。しっかり伝えてください。最後まで省略せずに》
　わたしが佐為の言葉を伝えると、ヒカルさんは苦笑いした。
「まあ、負けてんだから何言われても仕方ないな・・・・それはそれとして、もう外は暗いね。バス停まで送るよ」
　バス停までの道。
「ヒカルさん、今日はとても楽しかった。わたしもだし、佐為も楽しそうだったよ」
「ああ、それはよかった」
「また、こうやって対局する機会を作りましょう。今日、二人の対局を

見ていて、ネット碁とはぜんぜん違うって分かったの。佐為も、ネット碁だけじゃなくて、相手と向き合う対局もしたいはずなの。ただ、今はそれができる相手はヒカルさんしかいないの」
「それは、よく分かるよ」
「だから、せめてヒカルさんとは都合が付く限り対局させてあげたい。ただ、いつもヒカルさんの家ってわけにもいかないよね。そんなにしょっちゅう来てたら、隣近所で噂になるだろうし・・・・かと言って、碁盤のある場所って、なかなかないのよね」
「いや、そうでもない」
「えっ？」
「佐為、オマエ、目隠し碁できるよな」
《もちろん》
　佐為が即答した。
「もちろん、だそうです」
「じゃあ、碁盤は要らない。ほかの人に見られない場所ならどこでもいい」
「えっ、それって、どういうこと？」
《ルミ様、わたしが説明しましょうか》
　と佐為が言うのと同時に、ヒカルさんが説明を始めた。
「碁盤も碁石もなくても碁は打てるんだ。お互い頭の中に碁盤を思い浮かべて、自分が打つ場所を『３の八』とか『１４の三』とか言うんだよ。そうやって頭の中に棋譜を作っていく。これなら、碁盤も碁石もなくて碁が打てる」
「そんなことできるの？」
「できるよ・・・・まあ、誰でもってわけじゃないけど、オレや佐為くらいのレベルなら、できる」
「すごい！」
《ルミ様、あなただって同じようなことをなさっていますよ。心から美しいと思った黒白模様は、一瞬見ただけで記憶に留めておけるでしょう。それと同じです》
《えっ・・・・・》

こんな話をしているうちにバス停に着いた。バスが来るまで5分くらいある。その間、ヒカルさんは一緒に待ってくれた。この時、わたしに名案が浮かんだ。
「名案。ほかの人に見られないで二人が対局できる場所」
「どこ？」
「カラオケルーム」
「カラオケルーム？」
「うん。カラオケルームって、歌わなくてもいいんだよ。ドアを閉めれば外から見えないし、入る時も受付で名前を書くだけ。名前だって偽名でいいんだし。カラオケルームに遊びに来るような人たちって、まず碁なんか興味ないからヒカルさんの顔も知られていないだろうし」
「だけど、うるさいだろう」
「ドアを閉めれば、そうでもないよ。碁を打つのに不便はしないと思うよ」
「そうか・・・・」
ヒカルさんは今ひとつ納得しきれない様子。佐為はぜんぜん話について来れていない。まあ、ここで説明しなくても、実際その場になれば、分かるから。
こんな話をしているうちにバスが来て、わたしが乗り、ドアが閉まる。ヒカルさんが手を振る。わたしも手を振る。佐為も。
《佐為、よかったね。今日はすごくいい一日だった》
《そうですね》
《ヒカルさんとわたし、これからも仲良くやっていけそう》
佐為は心からうれしそうな表情。それから、何か考え事をする表情になり、わたしに語りかけた。
《わたしは今日、ヒカルと対局しながら、心が通じていました。碁打ちは、口に出して言わなくても、碁を打つだけで、石を置くだけで、互いの気持ちを伝え合うことができるのです。今日、差し向かいで碁を打ちながら、わたしはヒカルと心ゆくまで語り合いました。ヒカルの悲しみ、わたしがヒカルのもとに戻らなかったという悲しみも少しは

癒えたでしょう。これから対局のたびに心を通わせあうことで、少しずつでも悲しみが薄れていくでしょう。ですから、ルミ様、これからもなるべくヒカルと対局する機会を作ってください。お願いします》

佐為は深々と頭を垂れる。

《佐為、そんなに丁寧に頭を下げないで。うん、分かってるよ。これからもなるべくたくさん対局の機会を作ろうね》

それから1ヶ月もしない、3週間くらいでヒカルさんとわたしの都合がついた。試しにカラオケルームに行くことにした。その日は駅で待ち合わせた。念のため、ヒカルさんの目立ちすぎる前髪を隠す帽子をかぶってきてくれるようお願いした。できれば、サングラスとマスクも。

「おいおい、指名手配の犯人じゃないんだぜ」

とヒカルさんはメールで文句を書いてきたけど、その通りの格好で来てくれた。わたしは、ヒカルさんの格好を見て、つい笑ってしまった。

「何だよ、注文どおりの格好したのに、笑うなんて」

と言いながら、ヒカルさんも笑っている。

「ごめんなさい・・・・でも、実際に目で見ると、確かに、逆に目立ってしまうね」

こんな会話をしながら歩くわたしたちを佐為は楽しそうに見ている。

入り口で受付を済ませ、指定された番号の部屋に入る。わたしはプリンターで19路の碁盤を印刷した紙と黒ペン、白ペンをバッグから取り出した。

「ルミさん、せっかくだけど、それは要らないんだよ。この前、話したろう」

「うん、ヒカルさんと佐為には必要ないけど。わたしには必要なの」

ヒカルさんは「どういうこと?」という顔をしている。

「わたしは、黒石と白石が打ち込まれてできていく黒白模様を眺めるのが好きなの。だから、言われた場所に黒と白で丸を描いていくの」

「ふーん・・・・まあ、いいや。じゃあ始めようか」

「はい」
「お願いします」
「お願いします」
・・・・この日も佐為の勝ち。
次は、わたしの部屋で対局することにした。わたしはパソコンに碁盤の画面を呼び出して、ヒカルさんと佐為が言う場所に石を置いていく。終わった時にはパソコンに棋譜ができあがっている。それはわたしの貴重な資料。ヒカルさんはまだ佐為に勝てない。わたしにとっては、佐為に勝てないのは当たり前なんだけど、ヒカルさんは真剣に悔しがる。
「佐為を最初に倒すのは、やっぱり塔矢先生かなあ・・・・」
「トウヤ先生？」
「佐為から聞いてないの？」
《ルミ様、最初にちょっとお話ししました。わたしがヒカルに憑いていた時、一度だけネット碁で対局した相手です。日本で最強の棋士。おそらく神の一手に最も近い者です》
《ああ、そんなこと、話してたね》
ここから、わたしはヒカルさんにも聞こえるよう、声を出して話すことにする。
「佐為はネット碁で有名だから、そのうち塔矢先生からも対局を申し込まれるよ」
《待ち遠しいです・・・・》
という佐為の言葉と裏腹に、ヒカルさんはちょっと考え込んでいる様子。
「ヒカルさん、どうしたの？」
「実は・・・・」
ヒカルさんは言いにくそうにして、話を続ける。
「塔矢先生は佐為と対局しないかもしれない」
「どうして？」
佐為の顔に驚きと悲しみが広がる。
「ちょっと話しづらいんだが・・・・つまり塔矢先生から見ると、どん

な事情があるにせよネットだけで打って、現実の世界に姿を見せないのが、いかがわしいというか、疑わしいらしいんだ」
「そんなこと言ったって・・・・」
「うん。おれは佐為の事情をよく知ってるから、それは仕方ないと分るんだけど、事情を知らないと確かに『怪しい奴』と思われても仕方ない。決して塔矢先生が意地悪なわけじゃないんだ。塔矢先生は佐為のこと『強いだけではなく、美しい碁を打つ』と認めてくれてるんだ。それでもやっぱり、疑いが消えないんだな」
　佐為はがっかりした様子でうなだれている。わたしはあることを思いついた。
「ヒカルさん、塔矢先生の住所知ってる？」
「知ってるけど・・・・」
「教えて・・・・わたし、塔矢先生に手紙を書く」
《ルミ様！》
《佐為、大丈夫よ。これでも、元文学少女。文章書くのは下手じゃないんだから》
　そして、ヒカルさんに向かって質問した。
「塔矢先生は、口が堅い人？　秘密を守ってくれる人？」
「それは保証できる。ネット碁での対戦も秘密にしてくれたんだ」
　わたしは安心した。
　―　塔矢行洋先生
　突然お手紙を差し上げるご無礼をお許しください。
　高藤ルミともうします。
　ネット碁でＦ・ｓａｉの名前で知られている藤原佐為の代わりにパソコンのマウスをクリックしている者です。藤原佐為は、自分の手でマウスをクリックすることも、碁盤に石を置くこともできません。それどころか、塵一つ動かすことさえできない状態にあります。それでも、碁への情熱は誰にも負けず、神の一手の探求に日々精進しています。そのため毎日ネット碁で対局しています。わたしはそんな藤原佐為の指示の通りに碁盤の目にマウスをクリックしています。
　藤原佐為は先生との対局を心から望んでいます。１０年前の４月、

ネットで先生と対局し、今も「わたしの最良の対局」と話しています。叶うことならぜひまた1度、いえ、1度と言わず2度、3度でも、先生と対局したいと心から願っています。この願いを叶えていただけないでしょうか？

進藤本因坊から、先生は佐為が現実の世界に出ないことに疑念を抱いておられると伝え聞きました。藤原佐為が外に出られない事情は上に説明したとおりです。これ以上詳しい説明は、申し訳ありませんが、差し控えないといけない事情にあります。不十分きわまりない説明ですが、なにとぞご理解いただきたく存じます。藤原佐為は決して怪しい者ではありません。ただ純粋に神の一手を極めようとする高潔な棋士です。ネット碁で対局していただけないでしょうか。

それと、お願いばかりで心苦しいのですが、わたしと藤原佐為とF・ｓａｉとの関係は秘密にしておいてください。

心からお願いします。　―

１週間ほどして、先生から返事が届いた。好意的な文章で、対局の日時を設定したいと書いてあった。先生はメールをしないらしく、その後、何度か手紙をやりとりして、１２月１６日の朝１０時からに設定された。持ち時間３時間。ということは２人分で６時間。持ち時間を使い切った後の早差しの時間を含めると、７～８時間。１日がかりの本格的な対局。

この日は、ヒカルさんの希望で、ヒカルさんの家のパソコンで対局することになった。ヒカルさんは対局を見ながら碁盤に二人分の黒石と白石を並べる。パソコンディスプレイを見るより、実際に碁盤に石を並べる方が実感が湧くらしい。

この日、佐為の気迫はふだんのネット碁の時とはぜんぜん違っている。まるで目の前にほんとうに塔矢先生がいるかのよう。

《わたしも、行洋殿の気迫をパソコンから感じます》

と佐為は話す。わたしは、さすがにパソコンからは気迫を感じない。実際に打つ人と、言われたとおりマウスをクリックする人の差かな。それとも、碁を心から愛する人と、碁ではなく黒白模様に興味を抱く人との違いかな。まあ、思い悩んでも仕方ない。わたしは佐為の

言うとおりクリックするだけ。それでも、この日はふだんのヒカルさんとの対局と違い、打ち掛けをはさまず、つまり昼食を取らず、８時間くらいの対局を続けていて、佐為はもちろんわたしも空腹を感じなかったから、それなりに集中していたんだろう。
結果は、やはり佐為の勝ち！
対局が終わって、急に空腹を感じた。
「ヒカルさん、お腹が空いた。何か食べるものない？」
「カップ麺ならあるけど」
と言って、ヒカルさんはちょっと考えて、言葉を継いだ。
「今すぐ食べないと死にそうかい？　あと２０～３０分くらい待てないか？」
「・・・・？」
わたしは、どうしてヒカルさんがそんなこと聞くのか分らなかった。
「もうすぐクリスマスだ。たまには豪勢な晩メシごちそうするよ。いつもカップ麺じゃ悪いもんな。駅前まで一緒に行こう。タクシー呼ぶぜ」
「うん、じゃあ２０～３０分くらい我慢する」
タクシーを待つ間、ヒカルさんは碁盤をじっと見つめている。佐為も一緒に見つめている。
「何をしてるの？」
「検討してるんだ」
「検討？」
「うん。１局のうちにはいくつか勝負どころがある。そこで、実際に打たれたのとは別の手がなかったかどうか、別の手を打っていればどうなっていたか、考えるんだ」
「ふーん」
佐為が扇で１つの黒石を示す。黒石だから塔矢先生が打った石。わたしはそこを指さした。
「うん。そこに打つ代わりに、ここに打ったら」
とヒカルさんは話し、

「佐為は当然、ここに打ってくるな」
と話を続ける。
佐為はうなずき、次に別の場所を扇で示す。わたしはまたそこを指さす。
「うん・・・・」
佐為とヒカルさんがしばらく考えている。
《やはり、行洋殿の手が最善だったようですね》
と佐為が言うのとほとんど同時にヒカルさんも
「やっぱり、先生の応手が最善だ」
こんな話をしているうちにタクシーがやってきた。
食事を終えて、ヒカルさんがいつもと違うまじめな口調で語りかけた。
「ダメ元でお願いするんだけど、佐為のアカウント名、F．ｓａｉからｓａｉに変えてくれないか？　今あるｓａｉのアカウントは削除するから。ルミさんが作ったアカウントはそのままで名前だけ変えてくれればいい」
わたしは突然そんなことを言われてびっくりしたけど、すぐに
「ダメ」
と答えた。
ヒカルさんはうなだれた。
「やっぱりダメか」
佐為が悲しげな顔をしている。どちらの気持ちも分かるんだね。でも、わたしだって、ヒカルさんの気持ちも分かるんだよ。
「ヒカルさんの気持ちも分かるよ。ヒカルさんにとってｓａｉという名前がどれほど大切なものか、分かってるつもりよ。でもね、わたしにとっても、F．ｓａｉの名前は大切なの。佐為と出会ったその日に作ったの。今年の5月5日、佐為と出会ってから今までの、一緒に過ごした時間の重みがこもった名前なの。たとえヒカルさんの頼みでも、この名前は変えたくない」
「・・・・そうだよな。ぜったい、そうだよな・・・・」
ヒカルさんは寂しそうに笑った。それからいつもの明るい笑顔に

なった。
「晩メシくらいじゃ釣れない、大きすぎる頼みだったな」
この日の対局も含め、佐為はネット碁を続けている。無敗のまま年を越した。何百連勝なんだろう。数えてもいない。
わたしのデザインの勉強も進んでいる。いろんな形式の試行錯誤を終えて、自分の形式が定まったのがこの頃。自分で作った形式にのっとって、いろんな黒白模様を作り始めた。インスピレーションの元は無限にある。佐為の対局。2年生の学年末、進級判定の基準とされる学年末制作は我ながら上出来と思う。
〔幸せって、今のわたしのことだわ〕そう思っていた。そして、〔今この時、この幸せに浸りきろう〕とも思った。高校時代に読んだA・カミュのエッセイの一節が心に浮かんだ。ボルジア枢機卿が教皇に選ばれた時に語ったとされるせりふ、
「今この時、神が我々に教皇位を与えたのだ、時を惜しんでそれを享受すべし」
大げさかな？　ごく自然な連想なんだけど。
時を惜しんで・・・・わたしは、佐為と出会ってからアルバイトをいっさいやめた。その時間が惜しかった。そんな時間があれば、佐為に碁を打たせたい。そして佐為のそばで黒白模様のデザインを作っていたい。それがわたしにとって一番幸せな時間だから。
親が仕送りしてくれる最低限の生活費で暮らすようにした。服は買わない。今あるものだけ着ていて、凍え死にするわけじゃない。アクセサリーなんて、もってのほか。化粧品も買わない。すっぴんでいても、佐為に碁を打たせるのにもデザインを作るのにも、困ることはない。食べ物は、安くて手間がかからなくて、栄養をバランス良く取れるメニューを工夫した。

6：佐為の代理人

学年末制作を提出して間もない3月の中頃、この日、佐為とヒカルさんはわたしの部屋で対局した。まだ、ヒカルさんは佐為に勝てない。

「2目、1目の壁が厚いんだよなあ」

とヒカルさんは語る。わたしはできあがった棋譜を眺めている。佐為と対面して対局するようになって、ヒカルさんはネット碁で佐為と対局することはなくなったけど、ほかの相手とネット碁することはたまにあるし、ヒカルさんの周りにもネット碁している棋士はたくさんいて、無敵のF．ｓａｉはなにかにつけて話題になっているらしい。

「佐為は、ネット碁では超有名人だよ」

これまでも何度も聞いた言葉、わたしは素直にうれしい。碁に関心のない人たちまでとは言わないけど、多少なりとも碁に関心のある人はみんな佐為F．ｓａｉの存在を知ってほしい。佐為F．ｓａｉの存在を知らせたい。それはヒカルさんの願いでもあるはず。

「ヒカルさんも、佐為F．ｓａｉが有名になるのはうれしいでしょう？」

「もちろんさ。オレの周りでF．ｓａｉの噂を聞くと、自分のことみたいにうれしいぜ」

楽しそうにそう言って、ヒカルさんはちょっと考え込んだ。そして静かな口調で言葉を継いだ。

「そうだな、佐為がルミさんに憑いたのは正解だな。ルミさんだから、佐為が有名になるのを素直によろこべるんだ。オレの時は、オレが自分の碁を打ちながら、佐為の代わりに打ってた時は、佐為とオレのつながりがばれないかって心配してたもんな。だから、ネット碁で佐為が有名になると、怖くなってネット碁をやめたんだ。でも、ルミさんなら何の心配もない。精いっぱいネット碁やって、いくらでも佐為を有名にしてやれる」

ヒカルさんは静かに語るけど、こう話せるようになるまで、たくさ

ん苦しんだんだろうな。ひょっとしたら、今も苦しんでいるのかもしれない。そうかもしれないけど、だからこそ、わたしは佐為が有名だということを素直に喜ぼう。
「うん、佐為がもっと有名になるといいね」
　この言葉に佐為が遠慮がちに反論する。
《ルミ様、ヒカル、わたしは別に有名になりたいと思ってはいませんよ。ただ、より良い一手、最善の一手、神の一手を目指したいだけです》
　そういう佐為の貴族らしい奥ゆかしさは理解できるけど、わたしはそれには納得できないというか、それだけでは満足できない。
《違う》
《えっ？》
《それは違う・・・・「違う」という言い方は強すぎるかもしれないけど、１００点満点じゃない。８０点くらい。より良い一手、最善の一手は、佐為だけが知っていればいいわけじゃない。それはみんなに知られるべきよ。それだけの価値があるんだから。佐為の碁はみんなに知られる価値がある。だから、佐為はもっともっと有名になるべきよ》
　わたしは、ヒカルさんにも聞こえるよう声に出して話す。
「世の中には名作、傑作として知られるものがたくさんあるよね。文学なら源氏物語とかシェークスピアとか。美術ならモナリザとかモネの睡蓮とか。でも、わたし、たまに思うの。そういう作品はたまたま人々に注目される機会があった。だから有名になり、みんなに知られ、歴史にも残った。その背後に、同じくらい素晴らしいのにたまたま注目を浴びる機会がないまま忘れられ消え去った名作がたくさんあるんじゃないかって。それは作者にとっても残念だけど、読者、愛好家にとっても残念だと思うの。機会があれば知ることのできた名作を知らないままで終わるんだから。だとしたら、そんな『知られざる名作』の存在を知っている人は、それを世に知らせるためにできる範囲でいいから協力すべきだと思うの」
「で、ルミさんは佐為の碁もそういう名作だと思うんだ」

「ヒカルさんは、思わないの？」
「もちろん、オレだってそう思ってるさ」
　佐為は、ヒカルさんとわたしの会話を静かに聞いている。
「佐為は、ネット碁の世界では超有名よね。でも、ネット碁しない人たちには、あまり知られてないんじゃない？」
「まあ、ネット碁しない碁打ちもたくさんいるから、そんな連中は佐為Ｆ．ｓａｉを知らないだろうな」
「その人たちにも佐為の存在を知らせて、佐為のみごとな手筋を教えたいと思わない？」
　ヒカルさんはちょっと考え込む。
「思うけど、どうすればいいんだろう・・・・」
　わたしも考え込む。わたしは碁の世界のことは何も知らないから、わたしが考えても名案が浮かぶはずもないけど・・・・。
「ネット碁しない碁打ちにも佐為の存在を知らせるには、やっぱりリアルの世界で打つしかないんじゃないかなあ」
　とつぶやくヒカルさんに、わたしが
「リアルの世界で打つ？　つまり本因坊戦とか名人戦に出るってこと？」
　と反応すると、ヒカルさんはおかしそうに笑う。
「あっ、ごめん。笑ったりして、悪かった。ルミさんは碁の世界をぜんぜん知らないから、そんなこと言うのも仕方ないか。でもね、本因坊とか名人に挑戦するのは簡単じゃないんだ。ポッと出てきて挑戦できるものではないんだ。まず、プロ試験を受けてプロの棋士にならないといけない。それから何段階もの予選を勝ち抜いて、やっと挑戦者になれる。今から始めたとして３年か４年くらいかかるだろう」
　そうなんだ・・・・わたしはちょっと落ち込んだけど、ふと思いついた。
「ねえ、碁にはオープントーナメントはないの？」
「オープントーナメント？」
「つまり、プロでもアマでも、誰でも参加できて、予選をずっと勝ち抜けば、準決勝、決勝に進めて、それに勝てば優勝できるような碁の試

合」
「さあ、おれはずっとプロで打ってきたから、アマのことはあまり知らないんだ」
　それを聞いてわたしは自分でインターネットで調べた。意外なほどあっさりと見つかった。「日本オープン碁トーナメント」。全国を１６の地区に分け、地区大会を行ない、その優勝者１６人とプロなどのシード棋士１６人あわせて３２人で全国大会を行なう。１回戦、２回戦、準々決勝、準決勝、決勝を勝ち抜けば優勝。地区大会は５月から７月にかけて行なわれ、全国大会は９月から１０月にかけて行なわれる。参加申込み締め切りは、３月末。
「まだ間に合うじゃない！」
《ルミ様、本気ですか？》
《だめ？》
「ルミさん、ほんとうに参加するつもり？」
「だめ？」
「ルミさんが打つんだよね」
「佐為が打つの。わたしは佐為の代理人」
「そんなこと言ったって、周りはみんなルミさんが打ってると思うよ。オレの時もそうだった」
「わたしは佐為の、藤原佐為Ｆ．ｓａｉの代理人だって言い張るの。言い張り続けるの。そうすれば、佐為の名前がみんなに知れ渡るじゃない」
《ルミ様！》
《佐為、どうして止めるの？　佐為のためなのよ。そして碁を打つすべての人のためなのよ。佐為の碁はみんなが知る価値があるんだから、みんなに知らせてあげるのよ》
「ルミさん、そんなことしたら、ルミさんが佐為の名を背負うことになるよ」
「かまわないわ。どうせわたしは自分の碁を打ちたいなんて思っていない。わたしは佐為の代理人。わたしの碁は佐為の碁、それでいいの。それに、ヒカルさんがわたしを止める理由はないはずよ。ヒカル

さんだって、佐為に有名になってほしいんでしょう。佐為の碁をみんなに知ってほしいんでしょう。なのに、どうして止めるの？」

参加申込みはインターネットでもできる。翌日、わたしはトーナメントのサイトから申込みフォーマットを開き、必要事項を書き込み、送信ボタンを押した。佐為は何も言わず、わたしがパソコン作業するのを見ていた。

《佐為、怒ってる？》

《怒ってはいません。ただ・・・・》

《ただ？》

《ただ、ルミ様が痛ましい》

《痛ましくなんか、ないよ。わたしは佐為の代理人として優勝するの。ただそれだけよ》

《ただそれだけでは済みませんよ》

わたしは笑顔を見せる。明るい笑顔。

《それなら、それでいいの》

《・・・・質問が殺到しますよ。「佐為の代理人」とはどういう意味か？とか、佐為はどこにいるのか？とか》

《そんなの、みんな無視すればいい》

《無視したら、ありとあらゆる噂がささやかれますよ。いろんな記事が書き立てられますよ》

《いいじゃない。思いたい人には、思いたいように、思わせておけばいいの。言いたい人には、言いたいように、言わせておけばいいのよ》

《ルミ様・・・・》

佐為は、もうそれ以上何も言わない。

《佐為・・・・打ってくれるよね？》

佐為は静かにゆっくりうなずく。重大な覚悟を決めるように。

5月。佐為と出会って1年が過ぎた。わたしは3年生、学校の最終学年。そして、トーナメントの地区大会が始まる。南関東地区は参加者が一番多く、一番の激戦区、決勝戦まで10回以上の予選があるけど、要するに勝ち進むだけのこと。1回戦が始まる前、佐為に念を押した。

《佐為は弱い相手をいたぶるような碁は嫌いだけど、この大会では、どんな相手にも全力出して圧倒的な強さを見せつけて勝ってちょうだい。棋譜が残るわけじゃないけど、評判は少しずつでも広がるはずだから》
《ルミ様、分かっております。それに、弱者をいたぶることと、圧倒的な強さを見せることは、別物です。いたぶらず、しかも強さを印象づけるような勝ち方をしますから、ご心配なく》
《うん。何も心配してないわ》
　地区大会を気持ちよく勝ち進む。準決勝の前、地元の新聞の記者からインタビューを申し込まれたけど、断った。ただ「全国大会で優勝したら、お話しします」とだけ答えた。相手はびっくりしたような顔でわたしを見た。7月の決勝戦も勝って、順当に優勝。激戦区、南関東地区の優勝者が、碁歴が謎の女子だということは、碁の世界ではちょっとした話題になったようだけど、一般メディアの注目を集めるほどではなかった。
　9月に始まった全国大会。1回戦、2回戦を勝ち進み、準々決勝入りを決めた頃から一般メディアも注目するようになった。インタビューの申込みにはすべて「優勝したら話します」とだけ答え、それ以上の話は一切拒否。中には、わたしの周りから情報を集めるメディアもある。わたしの通学先が特定された。美術系の専門学校の3年生、コンピューターグラフィックスデザインを専攻していることも記事になった。
「謎の女流棋士はデザイナーの卵」
　いや、女流「棋士」じゃないよ。これからも棋士になるつもりは針の頭ほどもないし。
「化粧っ気のない知的美人」
　笑ってしまう。化粧しないのは事実だけど、言うに事欠いて知的「美人」とはね。わたしより何倍も何十倍も美しい人がすぐそばにいるのに。
「前代未聞の成り行きに、日本棋院は大騒ぎ」
　まあ、それはそうかも知れないけど、ヒカルさんがメールで伝えて

くれた限りでは、そんな大騒動というほどではない。ただ、わたしが注目を浴びているからしばらく対局できないのがとても残念とのこと。この点に関しては、ヒカルさん、ごめんね。でも、人の噂も七十五日よ。

この頃から、優勝インタビューの想定問答集を作り始めた。ネット碁をしない人たちにもしっかり佐為を印象づけ、しかも余計なことは言わない、言質を与えないような応答。それと、自分のことをどこまで語るか。佐為を背負ったわたしが優勝すれば、当然わたしが注目を浴びる。そうすれば、デザイナー（の卵）高藤ルミも有名になる。というか、すでに有名になっている。来年卒業を控え、経済的に自活しないといけないわたしにとって、それはとても誘惑的なんだけど・・・知られる機会がないままに名作が埋もれるのを残念に思う一方で、駄作が作者の知名度だけで世に知られることには嫌悪と反感をいだいていた。そんな状況がわたしに降りかかってくるかもしれない。「どんなことをしてでも有名になった方が勝ちよ」という悪魔のささやきをなんとか撃退したい・・・・。

〔あーあ、佐為のことならいくらでも思い切りよくなれるのに、自分のことになると・・・・〕

準々決勝、準決勝、決勝を予定どおり勝って、優勝。対局が終わってから、お決まりの記者会見。

「優勝、おめでとうございます」

というお決まりの文句。ふつうなら

「ありがとうございます」とか「運に恵まれたんです」

みたいなお決まりの返事をするところだけど、わたしはそんな無駄口たたかず、最初から本題を話す。

「地区大会の1回戦から今日の全国大会の決勝戦まで、わたしは碁を打ってません。碁を打ったのは、F・ｓａｉこと藤原佐為です。わたしは藤原佐為の代理として打っただけです」

記者会見場がどよめいた。

「それは、どういう意味でしょうか？」

「どういう意味って、その通りの意味です。わたしは藤原佐為の代理

として碁盤に石を置いただけです。Ｆ．ｓａｉこと藤原佐為は自分で石を置けないから、わたしが代わって石を置いたんです」
「何を話されているのか、まったく分かりません」
「分からないなら、分からないでけっこうです」
この辺で、会場は蜂の巣をつついたような騒ぎになる。
「きちんと質問に答えてください」
こう言い張る記者を見据えて、わたしは準備万端ととのえた口上を述べる。
「刑法犯の被疑者でさえ黙秘権を認められています。わたしだって、答えたくない質問に答えない権利はあります」
一瞬、会場が静まった。それから、別の記者が問う。
「つまり、いっさいの説明を拒否されるのですか？」
「そんなことは言ってません。答えてもいい質問にはよろこんでお答えします。答えたくない質問には答えないということです」
「どんな質問が答えてもいい質問で、どんな質問が答えられない質問でしょうか？」
「それは、みなさんが自由に質問してくださればいいんです。わたしの判断で、答えられる質問には答えます。答えられない質問には答えません。それだけのことです」
佐為は、何も言わず、扇で口元を隠して笑みを浮かべているだけ。まあ、笑うしかないよね、この状況。
ざわつく記者席から1人が立ち上がって質問を投げる。
「先ほどから話に出ているＦ．ｓａｉこと藤原佐為とは、誰のことでしょうか？」
わたしはその記者をにらむように見据える。
「いやしくも碁の取材をする記者で、ネット碁のＦ．ｓａｉ、これまで不敗を誇る無敵のＦ．ｓａｉを知らないとは、言語道断です。顔を洗って出直してください」
会場からブーイングと、一部の喝采が起きた。佐為は声を立てて（と言ってもわたししか聞こえないけど）笑い出した。
《ルミ様、それはなんとも手厳しい》

《当然よ。Ｆ．ｓａｉを知らない人間が碁の取材をする資格なんかないわ》
　喝采が起きたところから１人の記者が立ち上がって質問する。
「わたしはＦ．ｓａｉをよく存じておりますから、顔を洗う必要はないと思いますが・・・・」
　ここで記者席から笑い声
「つまり、あなた、高藤ルミさんがＦ．ｓａｉなのですね？」
「違います。先ほどから申し上げているとおり、わたしはＦ．ｓａｉこと藤原佐為の代理人です。本人ではありません」
「では、ご本人はどこにおられるのでしょうか？」
「その質問にはお答えできません」
　別の記者が質問に立つ。
「では、ともかくＦ．ｓａｉがどこかにいるとしましょう。どこかにいるＦ．ｓａｉから高藤ルミさんは指示を受けて碁盤に石を置いたのですね。いったいどうやって指示を受け取るのでしょうか？　テレパシーですか？」
　皮肉っぽい笑いが起きる。まあ、放っておけばいい。
「その質問にもお答えできません」
《何だか、みんな想定問答集の範囲内だなあ。新聞・雑誌の記者たちは、２０歳の女の子が想定できるくらいの質問しかできないのかなあ》
《ルミ様が賢すぎ、大胆不敵すぎるのです。とても２０歳の女人とは思えません》
《ない知恵を絞ってるのよ。ない勇気をかき集めてるのよ》
〔佐為のためよ。佐為の碁のためよ。佐為の碁がみんなに知れ渡るよう、全力の２割増し、５割増し、１０割増しでがんばってるの〕
　Ｆ．ｓａｉ佐為について一通りの質問が出尽くした後、わたしについての質問が寄せられた。
「高藤ルミさんは、来年ご卒業の予定ですね。プロの棋士を目指すのですか？　それともプロのデザイナーを目指すのですが？」
「棋士になるつもりはありません。わたしがこのトーナメントに参加

したのは、Ｆ．ｓａｉこと藤原佐為の碁をネット碁をしない囲碁ファンにも広く知ってほしかったからです。この目的は今回で十分達成したと思いますので、今後はリアルの碁の世界に立ち入るつもりはありません」
「では、デザイナーを目指されるということですね？」
「プロのデザイナーとして通用する作品を作れるようになりたいと願っています」
「今回のことで一躍注目を集めたから、デザイナーとしても引っ張りだこになるでしょう」
〔さあ、ここが正念場！〕
「今回、Ｆ．ｓａｉこと藤原佐為の碁を知っていただくために、どうしてもわたしが表に出ざるを得ませんでした。これから、なるべく早く忘れられたいと願っています。『人の噂も七十五日』ということわざが真実であってほしいと思っています。今回のトーナメントでの知名度が消えたところで、わたしの作品を作品として評価していただきたいと思っています。評価に値する作品を作れないなら、それはそれで仕方ないと思っています」
《ルミ様、それはまさに、かつてヒカルがわたしの力でなく自分の力で勝ちたいと願ったのと同じ心根です》
《うん、ヒカルさんの気持ち、よく分る》
「たいへん殊勝なお心掛けだと思いますが、期待に反して人の噂が七十五日で終わらず、それ以後も有名人であり続けていたら、どうなさるおつもりですか？」
〔仮定の質問にはお答えできません、と突っぱねてもいいんだけど・・・・〕
「不確定な未来について、確定的なことは言えません。ただ、駄作が作者の虚名のためにもてはやされるのは嫌いです。なるべくそうならないよう、わたしとしてできることはしたいと思っています。たとえば・・・・」
　ここでわたしは一息ついた。記者席は静かになっている。佐為もじっとわたしを見ている。

「もしわたしにお仕事のオファーがあれば、作者および作品の紹介に、『２０１３年度日本オープン碁トーナメント優勝』およびこれに類する文言は決して入れないでくださいと申し出るつもりです」
「その条件を認めてもらえないならオファーを蹴る、と理解してよろしいのですか？」
「はい、そのように理解していただいてけっこうです」
　この後もいくつかわたしについての質問が出されたけど、さほど際どいものではなかった。やがて記者会見の予定時間も終わりになる。記者会見場のざわつきは続いているけど、
「では、今日は何とも波乱に富んだ優勝者記者会見となりましたが、この辺で終了させていただいてよろしいでしょうか」
　と司会者が発言した。わたしは自分から発言を求めた。これを言うためにはいかない。これを言うために、トーナメントに参加し、優勝したんだ。そして、わたしに向きかけている記者たちの関心をもう一度しっかり佐為の方に戻さないと。
「先ほども話しましたがネット碁のＦ．ｓａｉこと藤原佐為はこれまで誰にも負けていません。不敗無敵の棋士です。日本一、世界一強いと信じています。Ｆ．ｓａｉこと藤原佐為はいつでもネット碁で対局に応じます。Ｆ．ｓａｉこと藤原佐為に勝てない棋士が『日本一』とか『世界一』と名乗るのは、わたしが許しません」
　一部で失笑が起こった。
「何様と思ってるんだ・・・・」
　笑わせておけばいい。誰が笑おうと、佐為の強さは揺るがないんだから。そして、目的は果たしたわ。今この時から、日本で碁を打つ人なら誰でもＦ．ｓａｉこと藤原佐為を知ってる。
《佐為、覚悟しておく方がいいかも。明日から、いや今日から、腕に覚えのある棋士たちが名誉挽回とばかりにＦ．ｓａｉに挑んでくるかも》
《望むところです》
　佐為はにこやかに笑う。
　翌日、学校に行くと、ユカが駆け寄ってきた。

「ルミ、すごいね、昨日のニュースずっと見てたよ」
「ユカ・・・・」
　わたしは彼女をしっかり見つめる。
「悪いけど、その話はしないで」
「えっ？」
「わたしのいないところでなら、何を話してもいいけど、わたしの前では、その話はしないで。忘れたいの」
　わたしは彼女をしっかり見つめる。彼女もしっかりわたしを見返す。そして、うなずいてくれた。
「うん、ルミがそう言うんなら」
「ユカ、ありがとう」
　わたしは彼女をハグした。
　そのまた翌日の新聞にヒカルさんが自分とＦ．ｓａｉの対局棋譜を公開し、コメントを寄せた。
「今年の日本オープン碁トーナメントの優勝者、高藤ルミさんはネット碁のＦ．ｓａｉを『日本一』、『世界一』と形容しました。日本一、世界一かどうか、わたしは断定できませんが、わたしは昨年１０月にＦ．ｓａｉとネット碁対局し敗れました。Ｆ．ｓａｉは現役本因坊より強いとは断言できます」
《ヒカルさん、援護射撃してくれてるんだ》
　その新聞を佐為に見せると、
《ヒカル・・・・》
　と言うだけで、ほかは何も言葉が出ない。言葉にできない気持ちって、あるよね。でも、わたしはきちんとお礼のメールを送った。これもまた、当然の礼儀。
　夕方、返事が来た。
「別にお礼なんか、いいよ。オレとしてできることをしたまでだ。それより、ルミさんがこんなに有名になると、対局するのが難しくなるな」
「いっそ、おおっぴらに打てば？　場所は、棋院の一般対局場でもいいし、どこかの碁会所でもいいけど」

「そんなことしたら、『オレもぜひＦ．ｓａｉと直接対局したい』って言い出す連中がたくさんいるぜ」
「そんなの、無視すればいい」
「そしたら、『なんで進藤だけ？』って怪しまれるだろう」
「そんなの、簡単よ。『進藤ヒカル本因坊はわたしを援護してくれた唯一のタイトルホルダーだから、海より深く山より高い恩義があるんです』って言えばいいの」
「ルミさん、頭いいね。よくそんなこと思いつくね」
　こんなメールをやりとり。
〔佐為のためにはいくらでも知恵を絞るわ・・・・あっ、ヒカルさんのためにもね〕
　結局、次からは毎回ヒカルさんの家で対局することに決めた。わたしも、その方が楽しいし、考えてみれば、棋院の一般対局場や碁会所に比べれば騒がれずに済むかも。
　新聞や雑誌やネット上には、いろんなことが書かれているらしい。読まなきゃいいの。書きたい者には、書きたいように、書かせておけばいいの。
　Ｆ．ｓａｉへの対局申込みには、明らかにタイトルホルダーかそれに準じる実力を持つと思われる強者からの申込みが増えた。それこそ佐為の望むところ。そんな相手にも佐為は勝ち続ける。当然よね。佐為だもの。

７：Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１

翌週、学校気付でわたし宛に手紙が届いた。

差出人はある新聞の文化部の記者。どうせ碁についての質問だろうと思ったけど、違っていた。「作者および作品の紹介に、『２０１３年度日本オープン碁トーナメント優勝』およびこれに類する文言は決して入れない」という条件を受け入れた上で、わたしの作品を紙面に掲載したいという申し入れ。わたしはよろこんだ。わたしの横で佐為も喜んでいる。

部屋に帰って、パソコンを立ち上げ、保存している作品を呼び出した。１年生の頃のものは別にして、２年の学年末制作から以後の２０枚くらいの作品にはそれなりに自信がある。でも、改めてじっくり見返しているうちに、欲が出てきた。もっと素晴らしい作品を掲載したいという欲。「作者および作品の紹介に、『２０１３年度日本オープン碁トーナメント優勝』およびこれに類する文言は決して入れない」という条件を受け入れたとしても、まだわたしの名前は佐為の名前と結びついて記憶されている。それはどうしようもない。それなら、佐為の名にふさわしい作品を仕上げたい。日本で一番美しい人の名前にふさわしい作品を仕上げたい。そのつもりで見返すと、これらの作品は、佐為の名にふさわしくない。わたしは、作品を表示するパソコンディスプレイを見つめながら、考え込んだ。

《ルミ様、どうされました？》

《・・・・》

《ルミ様、何か悩んでおられるのですか？》

《悩んでるんじゃないの。ちょっと・・・・ちょっと、がっかりしている》

佐為は気遣わしげな眼差しを投げる。

《わたしは自分の作品には、特に今年になってから作ったものには、それなりの自信があった。自信過剰じゃないと思う。学生の制作としては、合格点だと思う。でも、それじゃ足りないの。この程度じゃ、佐為にはふさわしくないの。佐為の名前を背負うことはできないの》

《ルミ様、何もわたしの名前を背負われなくても・・・・》
《背負うのよ。佐為の類い希な美しさを背負うの。佐為の美しさはわたしにしか見えないけど、わたしにしか見えないから、わたしの作品を通して佐為の美しさを感じてほしいの。そんな作品を仕上げたいの》
　佐為は、さらに気遣わしげな眼差しでわたしを見る。
《・・・・心配しないで。簡単なことよ。佐為の美しさにふさわしい作品を作ればいい。ただ、それだけのこと》
〔そうよ。作ればいいの。作るのよ。この世の誰より美しい佐為にふさわしい作品を作るの〕
　佐為は、黙ってわたしを見つめている。わたしは手紙に記されていたメールアドレスにメールを送った。「時間がほしい」というメール。手元にあるのは学生の制作としては合格でも作品として提出するには足りない。それにふさわしい作品を作るための時間がほしいというメール。折り返し、「いつまで？」という返事が来た。わたしは「年内いっぱい」と返信した。
《佐為、そろそろ対局の時間じゃない？》
《よろしいのですか？　ルミ様の作品を作るのに時間が必要なのでは・・・・》
《ただじっと考え込んでればアイデアが湧くってものではないわ。むしろこんな時こそ佐為の対局を見たい。わたしのインスピレーションの元なんだから》
《分かりました。ルミ様の美意識にかなう石の流れを心がけましょう》
　と答えながら、実際に対局が始まれば、佐為は勝負に集中する。
〔うん、もちろん、それでいいの。それでいいのよ、佐為〕
　翌日、学校に行くとユカが声を掛けてきた。
「ルミ、どうしたの、そんな真剣な顔して。怖いくらい真剣よ」
「あっ、そう。顔の出てるんだ・・・・作品のこと考えてて・・・・」
「えっ、もう卒業制作のこと考えてるの？」
「・・・・うっ、うん」

ユカの誤解は今に始まったことじゃないけど、今回は誤解してくれる方がありがたいかも。
「うん、全力投球するつもりなんだ」
「すごい、ルミは囲碁にも制作にも張り切ってるね。わたしも見習おう」
実際、わたしは真剣だ。まず、盤面の色は藤色で決まり。グラデーションを付けよう。濃淡の差はどれくらいにするか？　濃淡は上から下？　下から上？　右から左？　左から右？　右上から左下？　左上から右下？・・・・いろいろ考えた。このために1週間くらいかけた。そして、ある時ひらめいた。右上隅と左上隅が一番濃くて、そこから同心円状に薄くなって、下辺の中点が一番薄くなるグラデーション。この盤面が決まると、黒石と白石の配置はおもしろいように次々に思いついた。思いつくままにディスプレイ上に配置する。1日で2つ、3つくらいできあがる。なかなかいい。でも、何か足りない。どれも、99点だけど100点じゃない。ここで作業が止まってしまった。まあ、いいや。まだ時間はある。ゆっくりアイデアを温めていよう・・・・。そう思いながら、時間は過ぎていく。11月はまるまるこの状態で過ぎてしまい、12月になった。
12月になると、焦る気持ちが出てくる。どうしようもなければ、今まで作ったもののどれかを送る？　でも、そんな安易なことはしたくない・・・・そう思いながら、これまでにできあがっている何十枚のデザインを繰返し見直すけど、どうしても決定的な修正が思いつかない。
こんな時、新聞の担当記者から作品提出の期限を年末（つまり12月31日）から10日早めて12月21日にしてほしいとの要望が送信されてきた。
「えっ、なんで？・・・・この10日の違いはわたしにとっては大きいのよ」
わたしは、どうして急に締め切りを早めるのか質問した。返信には、もともとお正月の紙面を飾る予定だったけど、クリスマスの紙面を飾る方がふさわしいだろうという意見が社で出されたからとのこ

と。
〔そんなこと・・・・〕
「無理です」と返事したら、「どうしてもだめですか？」と押してきたので、「どうしても無理です」と返事した。しばらくして、「それなら最初の予定どおり年末でけっこうです」と回答が送信されてきた。
　こんなやりとりをしているうちに12月も下旬になったけど、まだ決定的なアイデアが浮かばない。こんな時にも、こんな時にこそ、佐為の対局はわたしにとって貴重な時間。佐為と相手が黒白模様を織り上げていくプロセスを見るのは、心躍り、心癒やされる。
　12月下旬もさらに後半、27日になっていた。その日、中盤の攻防の最中、佐為が右上隅に黒石を打ち込んだ。それを見た瞬間、何かがひらめいた。幸い、相手はちょっと考えているようで、すぐに打ち返してこない。わたしは盤面をじっと見つめている。わたしが何かに心奪われていることに佐為も気づいたらしい。
《ルミ様？》
《佐為、ありがとう。素晴らしいヒントを与えてくれた》
〔そう、ここに黒石を置くといいんだ。ここには黒石こそ置くべきなんだ。これまでのデザインではすべて、左右の上隅、藤色の一番濃い部分には白石を置いていた。その方が色のコントラストがくっきりするから。でも、どちらかを黒石にしたら？〕
　わたしは、ちょうど目隠し碁をするように、頭の中でデザインを描いた。
〔うん。これはいける！〕
　とはいえ、今は佐為の対局の真っ最中。まずは対局・・・・。こんなことを考えているうちに相手が打ち返してきた。
《ルミ様、よろしいですか？　ルミ様がお望みなら、ここでわたしが中押し負けで投了し・・・・》
《何バカなこと言ってるの！　佐為は無敵の棋士じゃないの。佐為は勝ち続けるのよ、強さを示し続けるのよ。でなきゃ、わたしは何のためにトーナメントで優勝したの？　今は対局が優先よ。さあ、対局、対局！》

佐為は笑みを浮かべてうなずく。
《では》
佐為は打つべき場所を扇で示した。それからわたしは、佐為が示す場所をクリックしながら、脳の半分で、いや４分の３くらいで、黒白模様を描いていた。佐為が応手を考える思考と、わたしが模様を考える思考が、コラボしている、シンクロしているみたい。振り向くと、佐為もふだん以上にのっている。
・・・・３０分ほどして相手が投了。
《佐為、申し訳ないけど、今日はこれで終わりにして。わたし、作品を仕上げたい》
《もちろん、よろしいですよ》
わたしは、藤色のグラデーションの盤面を表示して、その右上隅に黒石を置いた。そう、この濃い藤色に打たれた黒石・・・・それからは、わたしが考えるまでもなく自然に黒石や白石が盤面に現れ始めた。わたしはただそれを追ってディスプレイ上に表示していくだけ。
〔間違いない。これ最善。・・・・こんな単純なこと・・・・真理は、分ってしまえば単純だわ〕
佐為はそうやって夢中で作業するわたしを見ている。最初は、作品の制作に打ち込むわたしを見守るように優しい眼差しだったけど、やがて盤面に生まれ出てくる黒白模様に心惹かれ、真剣に見つめている。そして、その表情に驚きの色が混じるようになった。・・・・わたしは最後の黒石を描き込む。
《できあがった！》
《ルミ様、なんと素晴らしい》
《佐為も分る？　もちろん、分ってくれるよね》
すぐに保存し、そして印刷した。トーナメントの優勝賞金で買った高級プリンター。微細な色の違いもちゃんと印刷できる。ほんの２～３分で刷り上がるのに、それを待つのがもどかしい。そして、刷り上がり。
《佐為、見て！》
２日遅れ、いや３日遅れの佐為へのクリスマスプレゼント。そし

て、記念すべきわたしの第1作。Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１とタイトルを付けた。そして、改めて手にとってゆっくり眺める。佐為も脇から見ている。眺めながら、わたしは、このデザインが生まれようとしていたあの３０分間、まるで佐為の脳とわたしの脳が合体して、一緒に同時に、碁とデザインを考えているような気になった、あの奇跡のような時間を振り返り、たどりなおす。そうして、高揚感がすこしずつ鎮まり、しっとり落ち着いた満足感が心に広がっていった。

それからわたしは、快い疲労感の中で眠りに落ちた。

翌朝、わたしはさっそくＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１を添付ファイルとして記者にメールで送った。そして、昨夜の余韻のような軽い酩酊感と満足感の中で、これまで制作したデザインをゆっくり見返した。

それなりの出来だけど、昨日の生まれたＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１に比べると、これらはやはり習作。でも、わたしがたどった軌跡ではあるから、きちんとナンバリングして保存しておこう。これからも、胸を張って「作品」と呼べるもののほかに、習作もたくさん作るはずだけど、たぶん、これから一生かけて1万枚はつくらないだろうから4桁の番号にしよう。Ｅｔｕｄｅ０００１から始めて一番新しいのがＥｔｕｄｅ００８９。この中には、Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１を作るために試作した何十枚かも含まれている。そこで、改めて、Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎのナンバリングを考えた。昨夜は何も考えずに3桁の番号を付けたけど、よく考えてみても、おそらく作品の名に値する作品は一生かけて１０００枚は作らない、作れないだろう。なら、3桁でちょうどいい・・・・。

Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１を送った後、佐為とのんびりおしゃべりしていた。

《来年、と言ってもあと1週間もないけど、1月4日から7日までヒカルさんのうちに泊まり込んで対局するのよね》

《はい。三賀日はヒカルもいろいろあいさつ回りがあるようですが、4日からしばらく暇のようですし、ルミ様は7日まで冬休みですから》

《その時、Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１をヒカルさんにも見せてあげよう》
《それはいいですね・・・・でも、ヒカルにこういう芸術が分るでしょうか？　「猫に小判」では？・・・・・あっ、いや・・・・ルミ様、こんなことはヒカルに言わないでくださいね》
《もちろん、言わないわ》
　というわけで、年が明けた１月４日、わたしたちはヒカルさんの家に出かけた。
　ヒカルさんは機嫌が良さそうだった。
「ヒカルさん、どうしたの？」
「うん、昨日、塔矢先生んところに年始のあいさつに行ってきたんだけど、塔矢先生がルミさんを褒めてた」
「ええっ、うれしい。でも、どうして？」
　わたしは塔矢先生とは一面識もないけど、佐為が「最高の棋士」と認めているし、ヒカルさんが「先生」と呼んで尊敬しているから、とても立派な人なのだろうと信じている。そんな人から褒められていると聞いて、ちょっと舞い上がりそうになった。
「去年のトーナメント決勝戦の後の記者会見を見ていて、最初のうちは『外連（けれん）味が強いな。佐為らしくもない』って思ったそうだけど、途中からルミさんが自分のことを話していて、『今回のトーナメントでの知名度が消えたところで、わたしの作品を作品として評価していただきたいと思っています』とか、『駄作が作者の虚名のためにもてはやされるのは嫌いです』とか『もしお仕事のオファーがあれば、作者および作品の紹介に、『２０１３年度日本オープン碁トーナメント優勝』およびこれに類する文言は決して入れないでくださいと申し出るつもりです』とか話しているのを聞いて、なかなか真面目でしっかりした人だと見直したらしい。『佐為の代理人の名に恥じないな』って言ってた」
　それを聞いて、わたしはほんとうに舞い上がった。その勢いで、持ってきていたＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１をヒカルさんに見せた。

「ねっ、いいでしょう?」
　ヒカルさんはしばらく見ていて、
「うーん。こんな石の配置はあり得ないなあ」
　この言葉を聞いて、がっかりというより脱力し、舞い上がったのが、舞い落ちた。
《ヒカルは、碁のことしか頭にないんです》
《そうみたいね。出会ったばかりの頃の佐為もそうだったけど、ヒカルさんはちゃんと美意識を身につけてくれるかしら》
《それは何とも・・・・》
　佐為も、これは自信がなさそう。でも、気を取り直して、対局を始めた。
　Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１は１月４日の新聞にカラーで掲載された。ヒカルさんの家から戻ったら、郵送された掲載紙が郵便受けに入っていた。佐為と一緒に見る。一流のデザイナーが好意的なコメントを載せている。でも、そんなものはどうでもいい。１２月２７日の夜、Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１がパソコンディスプレイに現れていく過程を見ていた佐為の表情に浮かんだ驚きを込めた賞賛。できあがった時の感嘆。それがわたしにとって最高の報酬。
〔佐為の美しさを背負える極上の「構成」を制作したの、わたしが・・・・〕
　このＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１はわたしの生涯の最高傑作となるかもしれない。そんな予感が心をよぎる。出世作が最高傑作。ままあることね。それでも構わないと思う。あんな奇跡のような発想の奔出、それこそ全力の２割増し、５割増し、１０割増しの集中力とインスピレーション。それが一生で一度のことであっても仕方ない。ただ、この制作の過程でわたしは何かをつかんだ。それは、きっとわたしの中に残っている。
　新学期、学校気付でわたし宛に仕事の依頼が届いていた。わたしは「ご存知と思いますが、作者および作品の紹介に、『２０１３年度日本オープン碁トーナメント優勝』およびこれに類する文言は決して入れないでください。この条件を認めていただけないなら、お引き受けできません」

と返事した。
1週間ほどして、お断りの返事が来た。
それでいい。佐為の美しさを背負う覚悟と、佐為の知名度にただ乗りにして世に出るのとは、まったく別のこと。まるで正反対のこと。わたしは、わたしの作品だけで評価される。わたしの作品が評価に値しないのなら、それはそれで仕方ない。トーナメントでの注目を利用して仕事を取るのは、佐為への裏切り、わたし自身への裏切り、そしてきっと、佐為の力に頼らず自分の力で碁を打ってきたヒカルさんへの裏切りなんだ。
その後も何度か作品依頼の手紙が来た。そのたびにわたしは引き受けの条件をメールで送る。結局、卒業までにこの条件を受け入れてくれた依頼元は1カ所だけだった。
それでいいんだ。

8：白銀（しろがね）の時代

卒業。もう学生の身分ではないから、親からの仕送りは止まる。これからは自分の力で生計を立てていかないといけない。ずっと前から分かっていたこと。

そんなにたくさん稼ぐ必要はない。節約生活のスキルは磨き上げている。佐為と一緒の幸せに浸りきるために、時を惜しんでこの幸せを享受するために、アルバイトなんかする時間がもったいないから、親から送られる「最低限」の生活費で暮らしてきた。それでも、家賃を含めて最低限の支出は避けられない。去年の優勝賞金がまだ残っているから、1年くらいはなんとかなる。でもそれは、問題を先送りするだけ。これから1年のうちにデザインでそれだけ稼げるようになるか？　正直なところ、心もとない。

親は、実家に戻るよう言ってくる。実家なら、家賃は要らないし食費も払わくていいと。でも、それは拒否した。だって、九州の実家に戻ったら、佐為とヒカルさんが会う機会がなくなってしまう。・・・・それに、これからデザイナーとして仕事をしていく上でも、いくらメールやインターネットで情報を簡単にやりとりできるといっても、やはり直接会って話をする機会、必要な時には人と直接会える環境は確保しておきたい。

何かの機会にヒカルさんに会った時、といっても対局の時以外はあり得ないけど、ふと、この話を漏らした。

「ここに住めばいいじゃないか」

「えっ？」

わたしは、一瞬、何のことだか分からなかった。「ここ」というのは、今日対局を済ませたヒカルさんの家のこと？

「この家、オレ一人で住むには広すぎるんだ。台所や風呂を別にして、1階に4部屋、2階に2部屋ある。オレはふだん、2部屋だけ使っている。残り4部屋空いてるんだ。ルミさん、たとえば2階の2部屋を使って住めばいい」

わたしは考え込んだ。ヒカルさんの素直な親切心はとてもありが

たいのだけど、それを素直に受け取れないのは、わたしの小さなくだらないプライドのせいなのかな？・・・・恵まれた立場の人が困った人を助けようとする、その素直な親切心は素直に受け取ればいいのかな？・・・・きっと、そうなんだろうけど・・・・

「ルミさんとしては、ほどこしを受けるようで、いやなのかな？　それなら、部屋を提供する代わりに毎日朝メシを作ってもらうっていうのは、どうだろう？」

「朝メシ？」

「ルミさん、自分で作ってんだろう？」

「まあ、そうだけど」

　わたしの食生活事情を分かってもらえるかなあ・・・・

「朝は、この2年くらい毎日同じパターンなんだ。わたしはそれで慣れてるけど・・・・」

「同じパターンって？」

「パンとミルクとひよこ豆」

「パンとミルクと・・・・ひよこ豆って、豆だよね？　煮豆とか？」

「ううん。電子レンジでチンするだけ」

「・・・・？」

　ヒカルさんは想像つかないらしい。まあ、誰もこれだけでは想像できないはず。

「前の晩に水につけておいて、朝、電子レンジで加熱するの。それだけで、そのまま食べられる。味は薄味というか、ほとんど無味くらいだけど、食べ慣れると素朴においしいよ。わたしにとっては。まあ、味気ないなら、バターを混ぜたり、ドレッシングをかけたりしてもいいけど」

「ふーん」

「パンとミルクとひよこ豆。お金もかからず、時間もかからず、手間もかからない。それでいて、炭水化物もタンパク質も、C以外のビタミンもミネラルも、さらには食物繊維もそれなりに摂れる、栄養のバランスのいいメニューなの。朝、これを食べておけば、昼夜はそれこそハンバーガーとかカップ麺みたいなジャンクフードでも、最低限、栄

養失調にはならない」
「まあ、それはありがたいな・・・・」
「ヒカルさんは、どうしてるの？　自分で朝ご飯作ってるの？」
《無理！》
　と背後で佐為が即答した。
「オレは、毎朝家政婦さんに来てもらってる」
「すごい、ブルジョア！」
「まあ、それなりに稼いでるよ・・・・朝メシ作ってもらって、空いてる部屋と台所、風呂、廊下を掃除してもらってる・・・・だから、ルミさんが掃除もしてくれるなら、まじめに家政婦の給料払ってもいいんだ・・・・」
「わたし、毎日この家をぜんぶ掃除なんて、ぜったい無理」
　結局、わたしは毎日朝食を作るのと、週1回くらい、ヒカルさんの使っていない部屋と共有部分の掃除をすることになった。自分の部屋はそれぞれ自分が片付ける。わたしはその代わり、2階の2部屋を使わせてもらい、さらに近所の食品専門スーパーだけで使えるクレジットカードを預けられた。朝食の食材だけでなく、わたしの昼夜用の食材もそれで買っていい。
「どうせ、ルミさんの食費なんてたかがしれてるだろう？」
「うん、まあ1日１０００円は使わない」
「月3万か。家政婦の給料よりずっと安い。オレの方がありがたいくらいだよ」
「ああ、それと、2階の部屋にわたし専用のインターネット回線を引いてね。佐為がネット碁するのに必要だし、わたしも自分の部屋でネットできる方が便利だから」
「お安いご用だ」
　と言って、一呼吸おいて
「それに、ルミさんが住んでくれると、お互い暇な時にはいつでも佐為と対局できるからな」
　とつぶやいた。
「あっ、それが本音だったのか」

《ルミ様、今日はヒカルにまんまとしてやられましたね》
佐為が笑っている。ヒカルさんも、いたずらが図に当たった時の子供ような、うれしそうな笑顔を見せている。
「まあ、いいけど。佐為とヒカルさんの対局は、わたしも見てておもしろいから」
結局、４月半ばに引っ越し。
翌朝、初めてひよこ豆を口にしてヒカルさんは
「うーん、オレには薄味過ぎるな」
と言って、電子レンジから出しばかりの温かい豆にバターをちょっと混ぜた。
「うん、これならいける」
とまあ、こんな具合で、ヒカルさんとのルームシェアというか、部屋＋食費と労働力（料理＋掃除）のバーター取引というか、そんな奇妙な共同生活が始まった。朝食に目玉焼きくらいは添えるようにした。それくらいは作れる。
それから１週間ほどして、学校気付で送られた手紙が転送されてきた。いったん、我孫子の旧住所に転送され、そこからさらに今の住所に転送された。もとの宛名は英語で書いてある。中身も英語。高校時代の英語の知識を動員して読むと、ディープマインド社というＩＴ企業からＦ．ｓａｉへの仕事のオファーらしい。その会社はＡＩ（人工知能）の開発が本業なのだけど、その一環としてＡＩ碁プログラムを作っている。すでにプロトタイプというかバージョン１というべきものはできあがっていて、その改良と情報収集のため、そのＡＩ碁プログラムと対局してほしいという提案。対局料は１回あたり１００ドル。
〔１００ドル、およそ１万円・・・えっ、１回対局すると１万円？・・・じゃあ、１日１回対局すれば月３０万？　そんなにもらっていいの？〕
と驚いたけど、考えてみると、わたしを基準にしてはいけないのかも。本因坊のヒカルさんはもっとたくさん稼いでいる。佐為はそのヒカルさんよりも強いんだ。さらにもっと稼いでもおかしくはな

い・・・・でも、ネット碁とリアルの対局では違うだろうし・・・・
それに、佐為が対局しても、対局料はわたしの口座に振込まれるんだよなあ。ちょっと、心苦しいというか・・・・。
わたしは佐為に事情を話した。もともと囲碁指南として暮らしていた佐為にとって、対局で謝礼をもらうことには特に抵抗はないし、それがわたしに支払われることも気にしていない。
《わたしはルミ様のおかげで碁が打てるのです。ルミ様が謝礼を受け取られるのは、ごく当たり前のことと思います》
〔そうか。わたしが勝手に気に病んでるだけなのか・・・・〕
この点は一応クリアしたとして、問題はＡＩ碁というものを佐為に説明すること。もともと、コンピューター自体よくわかっていない佐為に人工知能は理解の範囲外らしい。まあ、技術的なことに疎いわたしの説明が下手なだけかもしれないけど。結局、
《ともかく対局してみれば》
ということになった。オファーの英文を読めば、こちらから契約を解除する条項もきちんと書かれているから、対局してみておもしろくなければ、契約解除の手続きをすればいい。
というわけで、手紙に記載されているサイトにアクセスし、案内に従って登録手続きを済ませ、対局することになった。
初めてのＡＩ碁との対局は、おもしろかった。佐為の代理人として碁を打つようになって２年。わたしもそれなりに、碁の自然な打ち方というか、定石というべき打ち方を感覚的に分っているらしい。その定石からはずれた手を、ＡＩ碁は時々打ってくる。わたしにはそれがおもしろい。さらに、美的な観点からも、定石はずれの石の配置が時として思わぬ効果を現わす。佐為をちらっと見ると、佐為もおもしろがっているように見える。結果はもちろん佐為の中押し勝ち。
《佐為、どうだった？》
《この者、おもしろい》
《やっぱり、佐為もそう思う？》
《はい。この者、決して強くはありません。ぎりぎりプロとして通用するかどうかというレベルです。ただ、普通では考えられないような

手を打ってきます。その半分くらいはただの失着なのですが、残り半分のさらに半分、つまり4分の1くらいは、打たれてみて「なるほど」と思う良い手です。残りの4分の1はその場では失着と思えるのに、後になってその意図を理解できる手です。今はまだ半分が失着だから弱いのですが、失着が減っていけば、急速に強くなるでしょう》
《ふーん》
《ルミ様は、どう思われました？》
《わたしも、デザインとして、とてもおもしろいと思った・・・・じゃあ、これからも対局する？》
《そうですね。ルミ様の時間の都合がつけば、毎日1局か2局くらい》
《わたしは、もう学校に行く必要がないから、それくらいは付き合えるわ》
　ということで、ディープマインド社との付き合いが始まった。
　そして、ゴールデンウィークが明けた頃、わたしたち3人にとって記念すべき事が起きた。ついにヒカルさんが佐為に勝った。
「やったー、とうとう佐為に勝ったぞ！　ついに佐為を越えたぞ！」
　ヒカルさんは、大はしゃぎ。もう20代も後半、四捨五入すれば30なのに、子供っぽいなあ。それとも、絶対勝てなかった相手に勝てた時は大人でもこんなにはしゃぐものなのかな。
《1回勝っただけで乗り越えたなどと大きな口を叩くんじゃありません。さあ、もう1局！》
「ヒカルさん、佐為が、1回勝ったくらいで乗り越えたなんて言うんじゃない、もう1局って言ってるよ」
　2局目は順当に（？）佐為が勝った。その後、だいたいヒカルさんの1勝4～5敗くらいで勝率はしばらく安定した。佐為も、最初は悔やしがったけど、ヒカルさんの成長はうれしいみたい。
「お互い暇な時にはいつでも佐為と対局できる」というヒカルさんのもくろみどおり、引っ越してきてからは週1～2回くらい対局している。対局を見てるのもおもしろいし、その後の雑談も楽しい。
「ルミさん、今年はオープン碁トーナメントに出てないだろう」
「あたりまえじゃない」

「もちろん、それは分っているけど、オレの周りでがっかりしてる連中がけっこういるんだ。『Ｆ．ｓａｉと直接対局できるなら、オレも出場するつもりだったのに』って」
「１度だけで十分よ。１度で目的を達成したんだから・・・・それに、記者たちとの約束もあるし」
「記者たちとの約束？」
「うん。トーナメント事件の高藤ルミはなるべく早く忘れられたいという約束」
　この頃から、デザインの仕事のオファーも来るようになった。初めのうちは月１件もなかったけど、そのうち月１件くらいは来るようになり、やがて月１～２件くらい来るようになった。わたしの名前がすこしずつ業界に知られるようになっているのかな。素直にうれしい。
　ただ、デザインというのはそのほとんどが、Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１のようにそれだけで作品として展示されるのではなく、特定の用途があるものなのだ。当たり前のことだけど、学生として制作している時にはあまり深く自覚しなかった。スカーフの柄の依頼はわりと多いけど、スカーフ全体をわたしのデザインで覆う場合と、一部のアクセントとして使われる場合では、求められるものがぜんぜん違う。アクセントとして使われる場合は、当然のことながら、全体のデザインとの調和あるいは意図的な不調和（サプライズ）を考えないといけない。素材によっても、まったく同じデザインが違う見え方をする。服のデザインでも同じ。洋服であれ和服であれ、服全体の形や模様、わたしのデザインがどの部分に使われるのか、生地の感触などを考慮する。バッグだと、あの形状が特有の条件を課す。
　そして大きさの制約。１９路の碁盤に円を描くには、それなりの大きさが必要。いろいろ試行して、１個の円の大きさは５ミリくらいないとデザインとして映えないことが分かっていた。最小で１辺およそ１０センチの大きさ。それより小さいと１９路を諦めて１３路とか９路にする。１９路で美しいデザインを作るコツと９路で美しいデザインを作るコツは違う。
　これらの実際的な用途に伴う制約は窮屈といえば窮屈だけど、逆に

新しいものを作り出す駆動力にもなる。わたし自身、それをうっとうしく思う部分もありながら、むしろ楽しんでいる部分の方が多い。
今でも印象に残っているのは、地味なチェック柄のコートの襟にアクセントを付けるデザイン。正方形の対角線が襟の折り返しになって、ボタンを留めていると半分の二等辺三角形の部分だけ見える。ボタンをはずして前をはだけると、デザイン全部が見える。この制約の中で、チェック柄に適度になじむアクセントとなり、半分だけでも美しく、全部見えても美しいデザインを作る仕事。ついつい引き込まれた。
わたしがデザインを作る仕事をしている間、佐為は脇でわたしの仕事ぶりを眺めている。余計な口出しはしない。仕事が一段落付いてほっと息をつくと、佐為もにこやかな表情を見せる。たまに、わたしの方から「これはスカーフの柄なの」とか「コートのデザインよ」などと説明すると、興味深げに聴いてくれる。
《ルミ様のコートにそのデザインを付けるのですか？》
《違う、違う。どこの誰が着るか分からないの》
《・・・・？》
佐為にはレディーメイドという概念が理解できないみたい。平安時代、貴族の衣装はみな母親や妻が手ずから作るか、婢（はしため）たちに作らせたものなんだろう。佐為が今着ている狩衣も、この世に二つとないオーダーメイドなんだろうなあ・・・・。
こんなふうに月日が過ぎていく。
ヒカルさんの家から歩いて5分くらいのところに荒川が流れている。わたしはちょくちょく散歩に出かけた。子供の頃から筑後川を眺めて育ったせいか、水のある景色はわたしの心を和ませる。たまに、ヒカルさんも一緒のこともある。
佐為は、ほぼ毎日1局ディープマインド社のＡＩ碁と対局し、それからネット碁の対局もこなす。週1回か2回ヒカルさんと対局する。
ヒカルさんは、佐為との対局のほか、もちろん囲碁のタイトルホルダーとして、対局だけでなく、イベントなどの仕事にも忙しい。
わたしは、依頼された仕事のほかに自分でも自由にデザインを作っ

ている。ＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎもＥｔｕｄｅもそれなりに増えていく。

Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１を作った時の予感は的中した。あれを越えるＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎは生まれていない。だからといって落胆はしない。奇跡は二度は起きない。それくらいのことは分っている。奇跡、あるいは神の恩寵、それに頼らない自分の地力での仕事として、わたしはＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００２以降の作品の出来映えに、それなりに納得している。黄金時代は過ぎてしまった。それはＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１を作っていた時、とりわけあの奇跡の３０分。あれがわたしの黄金時代。でも、その後も決してみじめだとは思わない。いうなれば白銀（しろがね）の時代。わたしが奇跡にも恩寵にも頼らず、自分の力で仕事をする時代。

9：去る者　残る者

ディープマインド社のＡＩ碁と対局するようになってから1年半ほど過ぎた9月、対局契約の終了が通知された。

《ルミ様、どういうことなのでしょう？》

《もう、ＡＩ碁と対局しなくていいってこと》

《はあ》

《楽しみが減ったね》

《そうですね。初めの頃に比べて、徐々に強くなっていました。これからどれほど強くなるのか、楽しみだったのですが》

その通知メールには、これまで開発に協力してくれたことへのお礼に続けて、アルファ碁と名付けられたそのＡＩ碁プログラムが翌月には欧州チャンピオンに挑戦する予定であり、挑戦の結果はメールでお知らせすると記されていた。

「ヒカルさん、欧州チャンピオンって、どれくらい強いの？」

「それはオレも分んねえ」

と答えたけど、さすがプロの棋士。2～3日後には棋院で情報を仕入れてきてくれた。

「欧州チャンピオンは日本でいえば2段か3段くらいの強さなんだって」

「それじゃあ、勝ったとしてもたいしたことないじゃない」

「オレもそう思う」

などとのんきなことを言っていられたのは6ヶ月間だけ。翌月、アルファ碁の欧州チャンピオンに対する勝利に続いて、ほんとうの衝撃は翌年、２０１６年の3月にやってきた。

２０１６年3月。当時世界最強の棋士の一人であったイ・セドル9段とアルファ碁の対局。世界中の囲碁ファン、囲碁関係者の注目を集めたこの対局はアルファ碁の4勝1敗で終わった。人間はＡＩに5局で1局勝てただけ。対局の棋譜は、途中経過も含めて、ネット上に公開された。佐為もヒカルさんも熱心に見ている。

「佐為、勝てるか？」

佐為は盤面を見つめて考え込んでいる。
《打ってみないと分かりませんが・・・・》
いつもの佐為らしくない、自信のない口調。
「打ってみないと分からない、と言ってるけど・・・・」
「けど？」
わたしは、佐為の自信なげな様子を説明すべきかどうか、迷う。わたしがヒカルさんに説明する前に、佐為が言葉を続ける。
《以前からの特徴は残っています。たまに、思いも寄らない手を打つ。以前は、その半分は失着でした。今や失着はほとんどなくなりました。その半分は、打たれた瞬間に「そんな手があったか」と感心させられる手、もう半分は後になって「ここでこういう働きを期待していたのか」と思い知らされる手》
わたしはこれをヒカルさんに説明した。
ヒカルさんはゆっくり、深くうなずいている。
アルファ碁とイ９段の対局は、大きな衝撃だった。だけど、それがすぐに日本の棋界に、プロ棋士の生活に影響を与えたとは言えない。その後も、人間の棋士たちの対局はそれまでどおり行なわれ、タイトル争いは囲碁ファンの話題になっていた。池に大きな石が投げ込まれ、大きな波が生じても、しだいに小さくなり、消えていくのと同じ。
そんな頃、深思考社Ｄｅｅｐ　Ｔｈｉｎｋｉｎｇという日本企業からわたしに、ＡＩに美意識を学習させるプロジェクトへの参加が提案された。具体的には、自作を含めＡＩの学習の資料とするためのさまざまな分野の作品の選定、ＡＩの創作物へのコメントなど。ビッグデータと言われる膨大な一般人から集められたデータを分析する一方で、専門家の知見も取り入れたいとのこと。わたしは興味を惹かれた。世界最強と言われた棋士を打ち倒し、佐為の自信を揺るがせたＡＩ碁の進化、それを目の当たりにして、ＡＩが芸術、美意識の領域でどのような威力を発揮するのか、どれほどの進化を見せるのか、美術・デザインに係わる者として興味があった。わたしは提案を受け入れ、プロジェクトに参加することにした。
インターネットを経由して情報をやりとりすれば、ほとんどの仕事

は自宅でできるけど、たまに都心にある深思考社のオフィスというか作業場に出かけることもある。そこで、仕事に係わる話のほか、雑談っぽいこともする。そんな雑談の中、日本国内にも美術家、デザイナーは掃いて捨てるほどいるのに、なぜわたしに白羽の矢が立てられたのか、その理由を尋ねたことがある。どうやら、アルファ碁が絡んでいるらしい。アルファ碁→囲碁→碁石の黒白模様→高藤ルミという連想ゲーム。さらに、プロジェクトのメンバーに碁の好きな人がいて、３年前のトーナメント事件を覚えていた。まだ忘れ去られていないとは、意外というか残念というか・・・・。

ただ、その人のおかげで、ＡＩ碁のその後についての情報に接することができたのは、ラッキーかも。もともと、ＡＩ関連企業としてアルファ碁の進化からは目を離せない事情はあるけど、その人は仕事の必要を越えてアルファ碁に関して情報を集めているようにも思えた。

その日その日の新しいできごとを追いかけるメディアの関心から離れた所で、ＡＩ碁は着々と進化し、実力を伸ばしているようだった。

その年の暮れから翌年初めにかけて、ＷｏｒｌｄＧｏとは別のネット碁サイトにＭａｇｉｓｔｅｒと名乗る謎の棋士が現われ、並みいる中国、韓国のプロ棋士たちを不眠不休で毎日８～１０人ずつなぎ倒すという事件が起きた。１人あたりの対局時間は２～３時間。最初のうちは、Ｆ．ｓａｉがＷｏｒｌｄＧｏを出て他流試合をしているという噂も流れたらしいけど、不眠不休で対局を続けることから、早い段階でＭａｇｉｓｔｅｒの正体はＡＩ碁だと信じられるようになっていた。世間に疎いわたしたちは年が明けて事情を知った。Ｍａｇｉｓｔｅｒの棋譜を見て、佐為も

《これはアルファ碁か、その仲間でしょう》

と語る。わたしが

《対局したい？》

と聞くと、即答せず、ちょっと考えてから、

《もちろん》

と答えた。即答しないのが意外だった。

ＷｏｒｌｄＧｏとは別のサイトなので、アカウント作成から始めな

いといけない。というか、専用の無料アプリケーションのダウンロードから始めないといけない。この辺のことは佐為はまったく分らないから、わたしがやるしかない。結局、準備完了したのは1月3日も夜遅くになったので、対局は翌日ということになった。

1月4日はヒカルさんも他に用事がないので、佐為とＭａｇｉｓｔｅｒの対局を観戦することになった。朝起きてすぐ対局を申し込むと、現在対局中。それは予想どおりだけど、ウェイティングリストにすでに3人いる。

「意外に少ないな」

とヒカルさん。

「えっ、そうなの？」

「うん。佐為なんか、今はどうだか知らないけど、昔オレが打ってた頃は、ウェイティングリストに１０人くらい並んだこともあったんだ」

「そうなんだ・・・・」

「まあ、このＭａｇｉｓｔｅｒは中国や韓国のトッププロをバッタバッタとなぎ倒したから、それを見ていると、挑戦する意欲が萎えて、挑戦者が減ってるのかもしれないけどな」

ともあれ、ずっとネット碁サイトを見続けるわけにもいかないので、わたしはパソコンで自分の作業を始めようと思ったけど、ヒカルさんが、

「この対局はオレの部屋のパソコンでやってくれないか？　そのわきで、オレ、碁盤に石を並べたい。いつかの、塔矢先生との対局の時みたいに」

と言い出した。まあ、それくらいのワガママはきいてもいいか。わたしは、ヒカルさんのパソコンにアプリケーションをダウンロードし、昨夜作成したアカウントにアクセスできることを確かめて、自分の部屋に戻った。お互い、時々ネット碁サイトを覗き、佐為の対局が始まりそうになったら声を掛けることにしている。

昼食を終えてサイトを覗くと、佐為の前のウェイティングリストは1人に減り、佐為の後に2人が待っている。冬至から１０日くらい過ぎた冬の短い日が傾きかける頃、佐為とＭａｇｉｓｔｅｒの対局が始

まった。
　対局が始まると同時に佐為の表情は緊張した。もちろん、これまでのＷｏｒｌｄＧｏでの対局でも、佐為はまじめに打っていたけど、これほどの緊張を見せたことはない。対局が進むにつれて、表情に厳しさが現れる。
「正直なところ、状況はどうなの？」
「正直なところ、佐為が不利だ」
　こんなヒカルさんとの会話も佐為には聞こえていない様子。そして、対局開始から2時間余り、佐為が投了した。
　佐為はそのまま呆然としたようにパソコン画面を見つめている。ヒカルさんは自分が石を並べた碁盤を見つめている。どちらも、一言も発しない。わたしも言葉をかけづらい。しばらくして、佐為がつぶやいた。
《去年の３月から１０ヶ月、アルファ碁はさらに見違えるほど強くなっています。人間はもうアルファ碁に勝てないでしょう・・・・つまり、神の一手を極めるのは、もはやわたしたちではないということですね》
　わたしはこの言葉をヒカルさんに伝えなかった。伝えなくても、佐為の気持ちは分っていると思うから。沈んだ雰囲気を破るようにわたしが
「もう夕食の時間ね。ヒカルさん、ラーメンでいい？　スーパーで最高級ラーメンを買ってくるよ。メンマやチャーシューもたくさん」
　と、お気楽そうに声を掛けた。
「ああ、お願いするよ」
　とヒカルさんが返事をしてくれた。
　夕食後、佐為とヒカルさんは、今日の対局を並べた碁盤をはさんで向かい合っている。
「はっきり言って、佐為の完敗だな」
　佐為はうなずく。うなずく姿をヒカルさんは見えないはずだけど、気配は分るみたい。そのまま二人とも黙って碁盤を見つめ合っている。しばらくして、佐為がわたしに話しかけた。

《ルミ様、わたしの中で、これまで止まっていた砂時計の砂が勢いよく落ち始めたのを感じます》
　わたしはびっくりした。突然話しかけられたからだけじゃなく、話の内容にも。
《どうしたの？》
　と問うのが精いっぱい。
　佐為は答える。
《わたしは務めを果たしたからです。いや、そうではありません。わたしの務めが消え去った、わたしの務めが奪われたからです。わたしが千年のワガママを聞いていただけたのは、神の一手を極めるためでした。だけど、それはわたしではなく、他の人たちでもなく、ＡＩという異形の者が成し遂げるはず。今日の1敗はただの1敗ではありません。それは、神の一手を極めるのはわたしではない、わたし以外の人間でもないことを告げる1敗です。であるなら、わたしはもはやこの地上に留まる理由がありません。神はわたしをこの地上に留めておく理由がありません。わたしはもうすぐこの地上を去ります。ルミ様に、ヒカルに、別れを告げないといけません》
　わたしは何も言えず、ただ佐為を見つめる。
《千年も追い求めていた神の一手が、このようにして達成されるとは・・・・それを求め続けたわたしの努力は、はかない幻だったのか・・・・。わたしは何のために千年のワガママを聞いてもらったのか・・・・何のために、かつて虎次郎の身を借り、次にヒカルの意識に住み着き、そしてさらにルミ様に宿ったのか？・・・・それはすべて無駄なことだったのか？・・・・》
　わたしは、黙って佐為を見つめながら、考え込む。佐為が去るのは辛い、悲しい。でも、いつかこの日が来ることは心の片隅で予想していた。「永遠の幸せ」なんて三文小説じみたことなど信じていないから。ただ、それでも、佐為がそんな気持ちのままで去って行くのは、とても辛くて悲しい。
　佐為と分かれるのはどうしようもない運命であるとしても、佐為の気持ちを慰めることはできるはず・・・・。それに、わたしは佐為と

一緒にいて幸せだった。この幸せは幻でも、無駄でもないはず。
《佐為、そんなこと言わないで。わたしと過ごした時間が、ヒカルさんと過ごした時間が、虎次郎と過ごした時間が幻、無駄だったなんて。わたしは佐為と一緒にいて幸せだった。ヒカルさんも虎次郎も同じだったはずよ。千年かけて追いかけた夢がＡＩによって達成されるのを見るのがどれほど辛いか、わたしにも想像できる。でも、だからといって、佐為の千年の夢が幻とか無駄だとか、そんなことはないの。夢を追うこと、そのものに意味があるんだよ・・・・
〝Ｗｅ ａｒｅ ｓｕｃｈ ｓｔｕｆｆ ａｓ ｄｒｅａｍｓ ａｒｅ ｍａｄｅ ｏｎ〟
「わたしたちは夢と同じものでできている」》
ふと思い出した。高校の英語の授業で習ったシェークスピアの『テンペスト』の中のせりふの一節。印象深くて覚えてる。今、この場で口を突いて出てきた。
《〝Ｗｅ ａｒｅ ｓｕｃｈ ｓｔｕｆｆ ａｓ ｄｒｅａｍｓ ａｒｅ ｍａｄｅ ｏｎ〟
「わたしたちは夢と同じものでできている」》
わたしは繰り返す。
《わたしたちは夢でしかないの。でも、だからこそ、夢がわたしたちなのよ。夢見ることが人生なのよ。結果がどうであれ、夢を追い続けることができたのなら、それでいいじゃない。それで幸せじゃないの。千年も自分の夢を追い続けたって、すばらしいことだと思うわ》
佐為はわたしをじっと見つめる。そう、あの日のように、わたしの前に初めて現われた、あの日のように。わたしも、その眼差しをしっかり受け止める。あの日のように。違うのは、佐為の目が涙で潤んでいること。そしてもわたしの目も。
《ルミ様。ありがとうございます。ほんとうに、ありがとうございます。ルミ様は最後の最後までわたしのために・・・・》
この時、ヒカルさんが声を掛けた。
「ルミさん、どうしたの？」
確かに、はたから見てもわたしの状態はまともじゃない。わたし

は、涙目のままヒカルさんの方を向いた。ヒカルさんは、わたしが涙ぐんでいるのを見て、驚いた。無理もないわ。これまで一度も、涙なんか見せたことなかったから。
《ルミ様、お願いです。わたしの言葉をヒカルに伝えてください。この場でこんなことをお願いするのがどれほど残酷なことか、分っております。分っておりますが、ルミ様に伝えていただかないと、ヒカルはわたしの声を聞けないのです》
　わたしはうなずく。
「ヒカルさん、驚かないでね。佐為がもうすぐ消えるの」
「えっ？」
「そうね。驚かないでと言われても驚くよね。佐為は、神の一手を極めるという使命がＡＩによって達成されるのを見て、自分の任務が終わった、自分の任務が消え失せたと分ったの。そうであるからには、神がこれ以上佐為をこの地上に留めておく理由がないことも分ったの。佐為は、自分の中でこれまで止まっていた砂時計の砂が勢いよく落ち始めたのを感じるって」
「佐為、またオレを置いていくのか？　また、オレを置いて消えてしまうのか？　どうしてだ？」
　佐為は悲しげにヒカルさんを見ている。
「ヒカルさん、佐為だって、別れたくって別れるわけじゃないの。運命の力なの。もともと、佐為は永遠にこの地上に留まれる存在ではないんだから」
「ルミさんは、それで納得できるのか？」
　わたしは返事に困る。納得している、とは言えないけど、それが運命だと受け入れてもいる。「出会いがあれば、別れがある」わたしは子供の頃からなんとなく受け入れていた。祖父の死の頃から？・・・・・
「出会いがあれば、別れがあるの」
　わたしはぽつりとつぶやいた。それに続いて、佐為がヒカルさんに語りかける。
《ヒカル、この前は、別れの言葉をかけることさえできませんでした。今回は、せめて別れを告げることができました。これからわたしが消

えるまでの間、別れを惜しむこともできます》
「ヒカルさん、佐為が言ってるの。この前は別れの言葉をかけることもできなかったけど、今度は別れを告げることができた。今しばらく、別れを惜しむこともできるって」
　ヒカルさんは、何も答えず、うなだれている。
《ルミ様、ヒカルの明日の予定を聞いてくれませんか？》
「ヒカルさん、明日は何か予定があるの？」
　ヒカルさんは、「急になんでそんなことを聞くんだ？」というようにけげんそうな顔をしている。
「佐為が、聞いてるの」
　それで、ちょっと納得したような表情になって、
「あさって、地方でイベントがあるから、あしたの夜のうちにそこに移動しておかないといけない。ここを夕方くらいまでには出ないといけない。それまでは特に用事はないけど」
　と答えた。
《じゃあ、今夜は碁を打ち明かしましょうと伝えてください・・・あっ、ルミ様、お付合いいただけますか？》
《もちろん》
「佐為が、今夜は碁を打ち明かそうって言ってる」
「ほんとうか？　うん、そうしよう」
　ヒカルさんの表情にちょっとばかり明るさが戻った。それからあわてたように、
「ルミさん、大丈夫か？」
　とわたしに聞くから
「うん、がんばる」
　と答えた。
　いつものように、対局が始まる。碁盤をはさんで向き合う佐為とヒカルさん。わたしはその脇にいて、佐為の扇が示す場所に石を置いていく。
　1時間くらいした頃かな、ヒカルさんが不思議そうに碁盤を見ている。

「ヒカルさん。ヒカルさんの番よ」
「あっ、そうだな」
　と言ってヒカルさんが黒石を置く。佐為が扇で位置を示す。わたしがそこに石を置こうとした時、ヒカルさんが話しかけた。
「ルミさん、碁笥をオレにくれ」
「えっ？」
「佐為の碁笥をオレにくれ。オレが打つ。オレ、見えるんだ。今、佐為の扇が見えるんだ」
　ヒカルさんはわたし見て、真剣な顔で話しかける。わたしは気味悪くなった。まさか、幻覚？　ヒカルさん、幻覚を見ている？　ヒカルさん、ショックで狂いかけてる？　そんなわたしの疑念などお構いなく、ヒカルさんは真剣な顔でわたしを見つめる。わたしは、碁笥を渡した。ヒカルさんはひったくるように碁笥を取ると、白石を碁盤に置いた。それはまさに、佐為が扇で示している場所。わたしは、今度は驚いた。
「ヒカルさん、ほんとうに見えてるんだ」
「うん。見えてるよ」
　佐為も驚いている。ヒカルさんは、こぼれ始めた涙を袖でぬぐっている。
「見えてるよ。服はぼやけているけど、佐為の扇と顔は、はっきり見える」
　ヒカルさんは涙をぬぐいながら話し続ける。
「これから佐為が扇で指しているところにオレが石を打つ。昔はいつもこうしてたんだ。こうやって差し向かいで対局してたんだ」
《ヒカル、涙で目がにじんで、石を置き間違えないようにね》
　ヒカルさんは何も反応しない。声は聞こえないみたい。だからわたしが伝える。
「ヒカルさん、佐為が、涙で目がにじんで石を置き間違えないようにって」
「泣いてなんかいないよ」
　と言いながら、ヒカルさんは涙をぬぐう。だけど、何手か打つうち

に、ヒカルさんの涙は乾き、いつもの対局の時の表情に戻った。ヒカルさんは自分の石を置き、佐為の扇が示す場所にも石を置く。
時が静かに過ぎていく。
いつだったか、佐為は「碁打ちは言葉を語らなくても石を打ち合うだけで心が通じる」と話したけど、今まさにそんな状態なんだろう、佐為とヒカルさんは。わたしはそれをはたで見ている。そうだね、碁を打つよりほかに、残された時間を過ごす方法はないよね。それが、二人が別れを告げる一番のやり方だよね。
佐為が自分のところに戻って来なかったヒカルさんがこれまでずっと心に秘めていた思いを考えれば、最後の夜は心ゆくまで対局させてあげよう。そんな二人を見ていることが、ヒカルさんと碁を打っている佐為をそばで眺めていることが、結局のところ、わたしにとってもうれしいことなんだ。
夜が更けるにつれ、わたしは二人の対局を見ながら、時々居眠りしそうになって、はっと目を覚ます。それに気づいたヒカルさんが、
「ルミさん、寝るかい？」
と聞くから、わたしは
「いやだ。わたしも二人と一緒にいたい。最後の夜なんだよ」
と答えた。するとヒカルさんは隣の自分の寝室から毛布をもってきて、わたしの肩に掛けてくれた。
「暖房してるけど、冬の夜に居眠りすると、風邪ひくよ」
そうして、対局を再開した。わたしは時々居眠りしそうになりながら、二人の対局を見つめていた。
長い冬の夜もいつかは明ける。障子の向こうが明るくなった頃、何局目かが終わり、石を碁笥に戻そうとするヒカルさんを佐為は扇で制した。ヒカルさんは佐為を見る。
《お別れの時間です》
ヒカルさんは唇の動きで言葉を読み取ったみたい。佐為の顔をじっと見つめて、
「佐為」
とだけつぶやいた。わたしは言葉も出ず、ただ佐為を見つめてい

る。佐為は穏やかに微笑んでいる。
「ヒカルさん、佐為が微笑んでるの、見える？」
「見える」
とだけ答えて、ヒカルさんは佐為を見つめている。やがて、佐為の姿が少しずつ薄れていき、消えた。でも、しばらく、そこに優しい微笑みの雰囲気がただよっている。ヒカルさんもそれを感じているらしい。そしてついに、その雰囲気も消えてしまった。
ヒカルさんは、消えた佐為を追うように立ち上がって障子を開けた。冬の朝の寒気が流れ込む。冬枯れした庭の向こうに澄んだ冬の空。そのてっぺんに白い下弦の月がかかっている。
わたしはそれから自分の部屋に戻って寝た。何年ぶりだろう、５年ぶり、４年半ぶり、佐為に見守られないで寝るのは。ちゃんと眠れるかなと思いながら、さすが徹夜明け、わたしはすぐに眠りに落ちた。
目が覚めたのはお昼頃。目が覚めると、習慣のように横を見る。そこに、佐為の姿はない。〔佐為は消えたんだ〕と心から実感したのは、この時。わたしはしばらくそのままベッドの中でぐずぐずしていたけど、やっと決心して起き出した。お腹も空いてるし。
キッチンで朝ご飯というより時間的には昼ご飯の用意をする。ヒカルさんはまだ寝ていたようだけど、キッチンでわたしがガタガタやっていると
「オレの分も頼む」
と障子越しに声を掛けられた。
いつものとおりの、パンとミルクとひよこ豆と目玉焼き。二人とも黙って食べる。食べ終わると、わたしは自分の部屋に戻る。ヒカルさんは、明日から地方で２日続きのイベント出演があり、今日のうちに移動するために出かけた。
急に二人ともいなくなった気分。
わたしは、パソコンを立ち上げ、ＷｏｒｌｄＧｏのサイトに入り、Ｆ．ｓａｉのアカウントを削除した。さらにＷｏｒｌｄＧｏのアプリケーションも削除しようと思った。佐為の碁を間近に見てきた後、他の参加者の対局を見ようとは思わないから。だけど、これは思いと

どまった。かつて、熱心なｓａｉファンがＡｒｃｈｉｖｅ　ｏｆ　ｓａｉを作ったように、今、まだＦ．ｓａｉが活動しているうちから、熱心なＦ．ｓａｉファンがＡｒｃｈｉｖｅ　ｏｆ　Ｆ．ｓａｉを作り、Ｆ．ｓａｉがＷｏｒｌｄＧｏで打った碁のすべての棋譜を整理、収集してくれている。５年間に佐為が行なった対局は数千に達する。それをきちんと整理し、さらに解説も加えている。わたしとは別の意味で熱心な佐為ファン、いやＦ．ｓａｉファンがいるんだな。このＡｒｃｈｉｖｅは、これからも訪れることがあるだろう。

わたしはこれまで何年もＷｏｒｌｄＧｏを利用していて初めてメッセージ機能を使い、このＡｒｃｈｉｖｅ　ｏｆ　Ｆ．ｓａｉの管理人に

「Ｆ．ｓａｉの代理人です。Ｆ．ｓａｉは消え去りました。もうこのサイトでも、ほかのどのサイトでも、対局することはありません。膨大なＦ．ｓａｉの棋譜をこのようにきちんと整理していただいて、ありがとうございました」

と伝えた。多大の手間ひまかけてＦ．ｓａｉの棋譜を整理してくれている人への、せめてものお礼。折り返し、

「高藤ルミさんですか？　Ｆ．ｓａｉが消え去ったとは、どういうことでしょうか？」

という質問が届いたので、

「これ以上詳しいことは申し上げられません」

と返信した。

それから、思い立って、これまで作ったＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎを印刷し、クリアファイルブックに整理することにした。これからもＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎは作るだろう。でも、佐為の存在を感じながら制作したこれまでと、佐為の記憶をたどって仕事をするはずのこれからは、出来上がるものの質が違うというか次元が違うというか・・・。だから、今の時点でこれまでの制作を整理しておきたい。ナンバリングすると、Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ０７５まで。このうち３０～４０くらいは依頼があって制作したもの。それらは、出来上がった製品、スカーフやコートやバッグなどの写真も添えて保存する。１枚、１

枚、ファイルポケットに入れるたびに、それを作っていた時の情景が思い浮かぶ。その時の佐為の表情が思い浮かぶ。どの時も同じようでいて、少しずつ違っている。その違いを1つ1つ、わたしはきちんと覚えている。75の佐為の表情をちゃんと覚えている。
《心から美しいと思ったものは・・・何年も何十年も心に留まっている》
　佐為と出会って間もない頃に交わした会話。そのとおりだわ。
〔記憶する価値のあるものはちゃんと記憶しておける〕そして、わたしにとって記憶する価値のあるものは、何をおいても、佐為のわきでＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎを制作していた時の記憶。
　その日、翌日、翌々日、わたしはＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎのファイルを見て過ごした。〔わたしは佐為と一緒の幸せに浸りきったんだ。時を惜しんで全力で幸せを味わい尽くしたんだ〕
　ヒカルさんが地方の仕事を終えて戻ってきた夕方、わたしはヒカルさんに話しかけた。
「佐為がいなくなってしまったから、ヒカルさんがここにわたしを住まわせる一番の目的がなくなったね。わたし、今までどおりここに住んでていいの？」
「もちろんさ。こちらからお願いするよ」
「うん・・・よかった・・・ここを出ると新たに部屋を探さないといけないという現実的な理由もあるけど、ヒカルさんと離れるのもちょっと寂しいんだ。もともと、ヒカルさんとは佐為とのつながりで付き合い始めたんだけど、もう何年も付き合っているうちに、ヒカルさんもわたしにとって大切な友人になったの」
「それは、オレも同じだよ。佐為がいなくなって寂しいのに、ルミさんまでいなくなったら、もっと寂しいじゃないか。それに・・・現実的な話をすれば、ルミさんがいなくなると、オレ、朝メシ食いっぱぐれる」
「ああ、それは重大」
　わたしは冗談めかして笑いながら答える。それから、ふと思い出した。

「あのね、3年前の4月、わたしが卒業後のことで心細い話をして、ヒカルさんが『ここに住めばいいじゃないか』って言ってくれた時、話の流れでわたしがヒカルさんに『「ヒカルさんは、どうしてるの？　自分で朝ご飯作ってるの？』って聞いたことあるでしょう。覚えてる？」

ヒカルさんはちょっと考え込んだ。

「うーん、よく覚えていねえ。そんなこと言われたような気もするけど」

「その時、わたしの後ろで佐為が『無理！』って即答したの。ヒカルさんには聞こえていなかったけど」

「そりゃあ、ぜったい即答するよ」

とヒカルさんは笑った。

それから、折につけて、わたしが「あの時、佐為がこんなこと言ってたの」みたいなことを話し、それを聞いてヒカルさんが楽しそうに笑うパターンの会話が何度か繰り返された。当たり前だけど、わたしは佐為のせりふをすべてヒカルさんに伝えていたわけではない。伝えていなかった佐為のせりふを、その時の状況を添えて説明する。一番受けるのは、わたしがＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１を制作した後の会話で飛び出した「猫に小判」発言。何度も話しては、何度も一緒に笑った。

わたしがヒカルさんに伝えなかった佐為の発言は、ほとんどは伝える必要がない、伝えるほどの意義がないから伝えなかったものばかり。そんなどうでもいいことを語り合って、愉快に笑いあう。どうして、こんな他愛ないことで、こんなに楽しめるんだろう・・・・いや、その理由は、はっきりしている。こんな他愛ないことで楽しめるのは・・・・そこに佐為がいるから。

終わり　　ＦＩＮ

１０：番外編　―　エピローグ

佐為が消えた年の５月、アルファ碁は中国のプロ棋士と対局し３連勝。その後、ディープマインド社はアルファ碁と人間の対局を今後一切行なわないと表明した。弱すぎる人間は相手にせず、神の一手の探求に邁進するということなのだろう。

わたしは深思考社の美意識プロジェクトへの協力を続けている。佐為と一緒にＡＩ碁の成長を観察した体験から、これからもＡＩは飛躍的に発展すると信じている。知的作業の専門家はいずれＡＩに駆逐されるだろう。メディアでも、医師や弁護士や会計士、あるいは金融トレーダーやファイナンシャルプランナーなどは近い将来、ＡＩに取って代わられるという記事が目に付くようになった。自動車や電車の自動運転も実現が近づき、ＡＩを備えたロボットがいろんな分野で人間より巧みに作業をするようになるとも書かれている。

一方、感性の領域、芸術の分野は人間に残ると言われている。でも、それは希望的観測だとわたしは思っている。わたしが作っているような組合わせに基づくデザインはＡＩの方が能率的に作れることは、すぐに分かる。一般的な絵画も、すでにルーベンス風とかセザンヌ風といった指定をすればそれらしい作品が作れるようになっている。そうやってＡＩが作った作品が人間の美意識に訴えるかどうか、それもまた、人間の美意識をＡＩに分析させ学習させることによって、人間の美意識にかなう作品を選択して人間に提示できるようになる。そうなった時、わたしは身を引こう。ＡＩ碁を見届けた佐為がこの世を去ったように。

そんなわたしが美意識プロジェクトに協力するのは、自分の首を絞める行為、墓穴を掘る行為？　かもしれないけど、わたしがやらなければ、他の誰かがやる。だったら、わたしが流れの中に身を置きたい。運命が避けられないのなら、それから目をそらすより、それを見据えていたい。それに、ＡＩがわたしの能力を乗り越え、わたしがデザインの仕事を放棄しても、わたしは幸せでいられる。わたしには佐為と過ごした月日の思い出があるから。

「ほんとうの幸せは、それを思い出すだけでその後の人生を幸せにしてくれる」

誰の書いたものかは思い出せないけど、中学生か高校生の時に読んだ文章。きっと、そうなんだ。そして、佐為と過ごした日々はほんとうの幸せなんだから、「佐為のことを思い出すだけでその後のわたしの人生を幸せにしてくれる」はず。

佐為が消えて５年。

深思考社から送られるＡＩの作品は年を追うごとに質が高まり、一般向けの商業デザインとしては通用するレベルに達している。ただ、わたしの心をとらえるほどではない。担当者にこの話をすると、

「高藤さんは、こんなにＡＩやコンピューターに身近に接しているのに、ＳＮＳにもネットショッピングにもあまり足跡を残さないから、嗜好をさぐりにくいんですよね。たいていの人は、ネットに残された個人情報から個人的な嗜好をかなり探れるんですけど」

よく聞く話だけど、ほんとうらしい。だけど、わたしの美意識を探るにはそんな面倒なことをしなくても、わたしが作ったＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎを見ればいい。佐為が消えた後に作ったものも含めＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎのナンバリングは１７３に達している。それに、わたしのお気に入りのＥｔｕｄｅもいくつか含めてＡＩに読み込ませれば、わたしの美意識は探れるだろう。というか、ＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎやＥｔｕｄｅのデータは資料としてすでにＡＩに読み込まれているはずではないか。こんな話をしたら、担当者は乗ってきた。

「そうだった。なんで今まで気がつかなかったんだろう。ＡＩを訓練する資料として読み込まれているけど、高藤さん個人の嗜好を探るために紐付けされていなかった」

こんな会話をして１週間もしないうちに、わたしのＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎに似せた黒白模様のサンプルが３枚送られてきた。どれ１つとして、わたしの作品と同じではない、ＡＩのオリジナル作品。そして、その質は・・・・わたしを越えている。唯一の例外はＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１。さすがにＡＩもまだこの作品を越えることはできない。でも、Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００２から１７３のどれ

よりも、送られてきたＡＩのオリジナル作品の方が優れている。わたしの美意識にかなう。

〔なんだ、わたしはもうＡＩに乗り越えられていたんだ〕

自分で自分がおかしかった。ＡＩは一般向けのデザインだけでなく、特定の個人の嗜好にあわせたデザインも作れるほどに進化している。わたしが気づかなかっただけ・・・・。この日を境に、わたしはＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎの制作をやめた。そして、深思考社との契約も解除し、デザイン制作の仕事も断ることにした。何もそこまでしなくてもいいのかもしれない。アルファ碁が人間の棋士を圧倒しても、人間の棋士は仕事を続けている。同じように、ＡＩに乗り越えられても人間のデザイナーが仕事を続けて悪いわけはない。ただ、わたしの気が済まない。Ｍａｇｉｓｔｅｒに完敗した佐為が消え去ったように、ＡＩに乗り越えられれば、わたしはデザインの仕事から消え去る。それは、佐為が消えた時、ごく自然にわたしの心に浮かんだこと。

佐為の夢が終わったように、わたしの夢も終わる。千年の夢ではない、十何年かの夢だけど、それでも夢を追えたのは幸せだった。まして、そのうちの５年は佐為と一緒だったんだから。

それからわたしは、Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎ００１から０７５までを入れたクリアファイルを１枚１枚たんねんに眺めるのが日課になった。どの１枚も、それを作った時の情景を思い出させる。佐為とともに過ごした時間。完璧な幸せの思い出。それを思い出すだけで幸せになれる。毎日これを繰り返す。

繰返しが退屈なんて、愚か者たちに言わせておけばいい。ほんとうに素晴らしいものは、何百回繰り返そうが、何千回繰り返そうが、何万回繰り返そうが、そのたびに人を幸せにする。

そんな日々が５年続いた後、ヒカルさんが飛行機事故で死んだ。享年４０歳。早すぎる死を悼む声が多かったけど、その後の状況を考えると、良い時に死んだと思う。それからすぐ、プロの棋士という生き方が成り立たなくなる時代が到来したから。「坂道を転がり落ちるように」という表現がぴったりなほど。ヒカルさんは、この状況を予見して、そうなる前に死んだのかと思えるほど。

まず、初心者への教育や指導碁の仕事がＡＩ碁に奪われた。人間よりＡＩ碁の方がずっと分かりやすくていねいに筋道立てて説明できる。完璧なログが記録されているからどこまで手順をさかのぼっても、その時点で想定されるあらゆる打ち手を提示し、どの打ち手が最善かを説明できる。これだけでも、人間が太刀打ちできない。まして、人間と違って感情のムラがなくどんな時にも穏やかに条理を尽くして対応するから、習う側も人間でなくＡＩの指導を希望する。

続いて、企業であれ個人の資産家であれ、囲碁のスポンサーがいなくなり、タイトル賞金や対局料が大幅に減額された。半分とかいう生やさしいものではなく、１桁の違い。さらに、賞金を付けられないために、１つ２つとタイトルが消滅し始めた。これはＡＩ碁のせいではないけど、広い意味でＡＩが原因。佐為が消え去る頃から予言されていたＡＩによる雇用破壊が現実となり、この頃には失業率が５０％に迫っていた。個人も企業も、社会全体も、囲碁にお金を出す余裕を失った。

そう、ヒカルさん、あなたは良い時に死んだ。囲碁の最後の輝き、夕映えの残照をいっぱい浴びて、笑顔を見せているあなたの姿だけが思い出に残っているから・・・・。

いや、人のことを語る前に、まず自分のこと。

家は、住み続けることを許された。子供のないヒカルさん、遺産は両親が相続したけど、この家はそのままわたしに住まわせてくれた。この頃、駅から徒歩圏ならまだしも、バスを使わないといけないような地域の築７０年くらいの木造住宅はほとんど資産価値を失っていて、売りたくても買い手がいないという事情もあるけど、老齢のご両親の親切心でもある。

ヒカルさんのカードは使えなくなる。だから食費は自分で支出する。それなりの蓄えはあるから１０年くらいは生きていける。その後は、西行法師に倣って断食往生？・・・・それもいい。わたしは今まで十分幸せだったから。

庭の手入れにかけるお金はないから、庭は荒れていく。ヒカルさんが死んだ年、庭は放っておくとこんなに雑草が繁るものかと思った。

さらに、2年、3年、4年と経つうちに、雑草は我が物顔ではびこり、庭の木も好き勝手に枝を伸ばす。門から玄関までの道はなんとか確保しているけど、それ以上のことはできない。

夜、風が吹くと、木の葉や草の葉がザワザワと音を立てる。それを聞きながら寝ていると、源氏物語に描かれた荒れ果てた屋敷に住む落魄の姫君の気分になる。夕顔？　それとも末摘花？・・・・それも悪くない。

そんな部屋の中で、わたしはＣｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎのファイルを見る。気が向くと、荒川の河原に行って、川の流れ、水面に反射する陽光を眺めながら、ファイルを見ることもある。ほかには何もすることがない、ほかに何かをする気もない。Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎを眺め、佐為を思い出すより以上の意義のあることなんか、ないから。そして、Ｃｏｍｐｏｓｉｔｉｏｎを眺め、佐為を思い出せば、それだけでわたしは幸せだから。ああ、たまにはヒカルさんのことも思い出す。

わたしは、このあばら家が朽ちていくのにあわせて、静かに朽ちていく。佐為の幸せの思い出に包まれて、死ぬまでずっと幸せに。

〔佐為、あなたは最後の最後まで、わたしを幸せでいさせてくれる〕